
2013年度

自由が丘産能短期大学

F D レポート vol.11

- . 2013 年度の F D 活動
- . 特集 本学のカリキュラムマップ
- . 定例報告
 - 1 . F D ・ S D 研修報告
 - 2 . 授業参観結果報告
 - 3 . 授業評価結果報告
 - 4 . 学外における F D 活動報告
 - 5 . S D 活動報告
 - 6 . 研究助成報告
- . F D 調査報告
 - 1 . 第 部卒業時学生調査報告



自由が丘産能短期大学

刊行にあたって

自由が丘産能短期大学
学長 森脇道子

自由が丘産能短期大学は1950年の開学以来、建学の精神に基づき一貫してビジネスにおける実践力を培う教育を行ってきました。本学のビジネス教育のベースは、わが国の産業心理学のパイオニアであり、アメリカのマネジメントを日本に初めて導入した創立者である上野陽一のご思想であります。本学では、上野陽一氏の能率（マネジメント）の考えに基づき、独自の教育プログラムを開発して「社会に出て活躍できる人材」の育成を目指しています。

さて、本学では学生によりよい教育を提供するために、長年にわたって教育研究活動を推進してきました。1992年度からFD専門部会を設置し、組織的にファカルティ・ディベロップメント（以下FD）活動を重ねてきましたが、2008年4月にFD活動の拠点として教育研究推進センター（FDセンター）を設置しました。全学の教職員がかかわる組織的なFD活動を推進し、自由が丘産能短期大学の短期大学士課程教育の実現に向けたFD活動を強化していきました。従来の「授業プログラム開発」「授業評価」「授業参観」「FD研修会」「教育成果に関する調査」に加えて、FD活動の企画運営機能を充実し、中長期的視点に立った教育研究機能を高めていきます。

本学では、FD活動の状況を広く社会に公開するため2003年度より「自由が丘産能短期大学FDレポート」としてまとめ、学外の関係機関や他大学の皆様にお届けしております。少しでも学外の皆様のお役に立てればと思います。また、学外の貴重な意見をいただくことで、さらにFD活動を改善できればと考えた次第です。

社会環境が大きく変動し、ビジネス現場も変容する中、学生に対する教育をよりよいものにしていくためにFD活動は欠かせないものです。私どもは、今後ともFD活動のあり方を常に見直し、効果的なFD活動を進展させることによって、本学の教育の一層の充実をはかりたいと思っております。

2013年度のFDレポートには、定例報告に加えて「本学のカリキュラムマップ」を授業テーマ報告として掲載しました。本学のカリキュラム編成の重要な柱であり、本学の教育の到達目標を達成する学習成果をあげるために必須である仕組みです。本学の実情をご理解のうえ、広く社会からのご意見を願います。

目 次

I. 2013 年度 F D 活動の概要	2
II. 特集 本学のカリキュラムマップ	5
III. 定例報告	
1. F D ・ S D 研修報告	9
2. 授業参観結果報告	13
3. 授業評価結果報告	15
4. 学外における F D 活動報告	24
5. S D 活動報告	26
6. 研究助成報告	30
IV. F D 調査報告	
1. 第 I 部卒業時学生調査報告	32
参考 : F D レポート目次一覧	51

I . 2013 年度FD活動の概要

I-1. 2013年度 F Dセンター重点目標

2008年4月に自由が丘短期大学の付属施設として、教育研究推進センター（以下 F Dセンター）は設置された。本学は、短大中長期目標に「組織的F D・S D活動の強化」を位置づけて重視してきたが、F Dセンターは2008年度に中期活動プランを策定した。年度ごとに重点的に実施する活動目標を設定してF D活動を行っている。

2013年度 教育研究推進センターの重点課題
課題1：第三者評価の訪問調査時の備え付け資料として本学の学習成果の評価方法その実践結果をまとめる。
課題2：第三者評価用「自己点検・評価報告書」を活用したF D・S D研修会を実施する。
課題3：本学の特色ある教育実践の歴史をまとめて教育実践記録「自由が丘産能短期大学65年の軌跡 未来へとつなぐ想い」を作成する。
課題4：新コース体制に対応した共通教育研究を整備する。 ①新コース体制に対応する「学びのサポート」プログラムを改良する。 ②卒業レポートによって学習成果を把握する。 ③基本技能到達度テストを実施する。

I - 2. 2013 年度の F D 活動の概要

2013 年度教育研究推進センター主な F D 活動

年月	活動内容
2013 年 6 月	第 1 回企画運営会議 ・科目改善の年度計画 「就業への道」「就業とキャリア考」「実務学習研究」 ・「学びの目標とキャリア」実施報告 ・2013年度 活動目標の確認
2013 年 7 月	第 2 回企画運営会議 ・2013 年度 兼任・専任教員 FD ミーティング結果報告 ・基本技能到達度テストの実施計画 ・FD 研修会・SD 研修会企画 (2 月 FD・SD 研修会 「第三者評価結果の受け止め」) ・FD レポート編集計画
2013 年 7 月	研究員定例ミーティング① ・FD 研究 意見交換 ・学外セミナー等への参加報告
2013 年 9 月	第 3 回企画運営会議 ・センター・WG 活動 中間報告
2013 年 10 月	研究員定例ミーティング② ・FD 研究 意見交換 ・基本技能到達度テスト(前学期まとめ) ・FD センター研究室の整備計画
2013 年 12 月	第 4 回企画運営会議 ・センター・WG 活動報告(池内・WG リーダー) ・FD・SD 研修会運営計画の決定 (2 月 FD・SD 研修会 「第三者評価結果の受け止め」) ・FD センター研究室の整備計画
2014 年 2 月	FD・SD 研修会(2014/2/12 10:00-12:00) テーマ「2013 年度に受審した第三者評価の受け止めと共有化」
2014 年 2 月	第 5 回企画運営会議 ・科目改善の実施結果報告 「就業への道」「就業とキャリア考」「実務学習研究」 ・FD・SD 研修会報告 ・2013 年度活動のまとめ
2014 年 3 月	第 6 回企画運営会議 ・2014 年度 活動目標・活動計画の検討 ・FD センター研究室の整備計画

Ⅱ. 特集 本学のカリキュラムマップ

Ⅱ. 特集 本学のカリキュラムマップ 教育研修推進センター

1. カリキュラムマップとは

本学は三つの方針「学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」「入学者受け入れの方針」を定め、教育課程を編成している。教育課程編成・実施の方針については、到達目標、それを細分化した具体的な学習目標、さらに個々の授業科目の学習目標の3つのレベルの教育の目標を設定し、それぞれに対応するプログラムを明確に定めている。これらを一覧できる仕組みとしてカリキュラムマップ（到達目標（学習・教育目標）と授業科目の学習目標の関係一覧）を整備してきた。カリキュラムマップ（図表1）により、体系的に教育課程を編成し、学生や教職員にわかりやすい形で示すことが可能となる。

図表1 カリキュラムマップ例

授業科目 例：チーム学習へのステップ		授業科目の学習目標	授業科目の授業プログラム	到達目標(学習・教育目標) 例：①大学の学びのための基礎能力	具体的な学習目標 例：チームで学習活動ができる力											
教養教育	学習の基礎			①大学の学びのための基礎能力	②社会・仕事の基本能力	③ビジネス実務能力	④現代社会を生きる力	①大学の学びのための基礎能力	②社会・仕事の基本能力	③ビジネス実務能力	④現代社会を生きる力	①大学の学びのための基礎能力	②社会・仕事の基本能力	③ビジネス実務能力	④現代社会を生きる力	
学習目標	授業プログラム			①大学の学びのための基礎能力	②社会・仕事の基本能力	③ビジネス実務能力	④現代社会を生きる力	①大学の学びのための基礎能力	②社会・仕事の基本能力	③ビジネス実務能力	④現代社会を生きる力	①大学の学びのための基礎能力	②社会・仕事の基本能力	③ビジネス実務能力	④現代社会を生きる力	
チーム学習へのステップ	必修科目			●												
チームで考えを深め、進展させ、結果をまとめる討議方法を身につけることができる。	チーム学習に必要なグループ討議、情報収集、データまとめ方法を演習で進める。			○												
対話を通して他人から情報を得る「インタビュー法」の基礎知識を理解できる。	インタビューの基礎知識をもとに先輩にインタビューする実体験を行う。			○												
多様なデータをわかりやすく表現し、まとめるカード法を身につけることができる。	インタビューから得た情報をカード化し、カード法(KJ法)によってまとめる演習を行う。			○												
チーム学習において、自ら新たな課題を明確にして、学習を継続させることができる。	「myノート」を活用し、授業におけるチーム学習や個人の事前学習・事後学習の内容をていねいに記録、振り返り学習を進める。			◎												
フィールド・ワーク	必修科目			●												
フィールドで調査するフィールドワーク(観察・インタビュー)を理解、実践できる。	実社会で働く人にアプローチしてフィールドワーク調査の体験学習を行う。			◎												
調査データをまとめ、考察し、調査結果を他人にわかりやすく伝える。	フィールド(現場)から得たデータをまとめ、考察し、その結果を第三者に伝える報告書を作成し、発表会を行う。			◎												
実社会で働く人の姿を知るとともに、自分の実践学習に必要な課題を明確にできる。	フィールド(現場)に身を置く調査活動にチームで取り組み、「myノート」に活動や振り返りを記録する。			◎												
学びのサポート	必修科目			●												
先輩や仲間との交流を深め、ともに学びあうサポート基礎力を身につけることができる。	先輩や仲間と交流する場に慣れ、身近なテーマで先輩や仲間と語り合い、ともに考える経験から、学びのサポート学習をする。			○												
自分の設定した学びの目標の達成状況を自己評価し、その結果を他	「私の到達目標」を設定し、学期ごとに達成状況を確認するプロセスから			○												

出所：シラバス 2013年度版

本学は、2年間の短期大学士課程教育の到達目標について、学生が主体的に学ぶ目標としての「学習目標」、教員が教育によって達成するべき「教育目標」の2つの意味をもって

いることから、本短期大学は「学習・教育目標」と称している。学位授与の方針で示した育成する人材をもとに、到達目標（学習・教育目標）を「大学の学びのための基礎能力」「社会・仕事の基本技能」「ビジネス実務能力」「現代社会を生きる力」の4つの能力の開発として定めている。この到達目標（学習・教育目標）の達成のために、到達目標をさらに細分化し、学生が具体的にどのような学習を行って行けばよいかを示すための目標を設定している。本学では、これを「具体的な学習目標」と称しており、到達目標（学習・教育目標）と個々の授業科目の学習目標をつなぐ役割をもたせている。

カリキュラムマップは、到達目標（学習・教育目標）、具体的な学習目標、授業科目の学習目標のつながりを示すものである。「具体的な学習目標」によって、学生は到達目標（学習・教育目標）を達成するために、どのような具体的な能力を習得する必要があるかを理解することができる。また、カリキュラムマップにより、個々の授業科目を学習することで、到達目標（学習・教育目標）のどの学習成果を得ることができるかを、明確にすることができる。学生も個々の授業科目の学習成果が2年間の到達目標（学習・教育目標）のどの部分につながっているか理解することができる。このように、本学は学習成果に対応したわかりやすい授業科目の編成を実現している。

カリキュラムマップをもとにした教育課程の編成の検討に際して、2年間の短期大学士課程教育の教育課程と個々の授業科目のつながりが明確になり、教育課程の達成に関する抜け落ちがないか検証をすることができた。このことから、本短期大学の教育課程の学習成果は教育プログラムに裏付けられており達成可能であると考えられる。

2. カリキュラムマップの開発と活用

カリキュラムマップは、2年間の短期大学士課程教育の到達度を明確にし、その達成度を評価する「学習成果の評価方法」を研究する過程で、本学が開発してきたものである。本学教育研究推進センターの池内と石嶺が、2008年10月24日に、山口大学の大学教育センターを調査した。山口大学は、「目標達成型大学教育改善プログラム」の取組が2008年度文部科学省質の高い大学教育推進プログラムに採択された。この取組の中核にあるのがグラジュエーション・ポリシーという到達目標である。そして、FD活動として、グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、カリキュラム・ポリシー、Webシラバス、学生授業評価、教員授業自己評価の関係を全教員に理解してもらう活動を行っていた。

山口大学とともに金沢工業大学の取組を調査した結果、本学は教育の質の保証につながるカリキュラムマップを開発することを決定した。2008年度には開発する能力評価基準を明確にし、2009年度から教育研究推進センターとコース主任会議が連携をして、カリキュラムマップの開発を推進してきた。

2011年度にはほぼ完成させ、2012年度の学生便覧（SANNONAVI）に掲載して、全学生に公開して活用を進めてきた。2012年度の委託研究によって、伊藤、豊田、石嶺が学生用の「カリキュラムマップ ガイドブック（図表2）」を完成させ、ガイダンス等で学生

への浸透を図った。

これらによって、教職員、学生のキャリアラムマップの共有化が促進できた。現在、本学は、到達目標を達成するためのカリキュラム編成、シラバスの作成、授業プログラムの開発、学生の学習目標の設定と達成度評価、2年間の学習成果の評価等にかリキュラムマップを活用している。

図表2 カリキュラムマップ ガイドブック

The image displays two pages from a 'Curriculum Map Handbook'. The left page is the cover, titled 'カリキュラムマップハンドブック 2013年改訂版', and includes introductory text about the handbook's purpose and how to use it. The right page is a detailed curriculum map for the 'Faculty of Education / Faculty of Business Administration / Faculty of Health Sciences' (教育学部/経営学部/健康学部). It features a grid showing learning objectives (学習目標) and programs (授業プログラム) across various courses. Below the grid, there are two tables: '1. 学習目標' (Learning Objectives) and '2. 現代キャリア教育' (Modern Career Education), which list specific objectives and programs with corresponding checkboxes for achievement.

III. 定例報告

Ⅲ－1. FD・SD研修報告

教育研究推進センター FD・SD研修グループ 豊田雄彦

FD・SD研修会報告

1. 研修概要

(1) 研修テーマ 「2013年度に受審した第三者評価の受け止めと共有化」

(2) 研修目的

2013年度に受審した第三者評価の評価結果から、本学の特色と課題を共有化する。

(3) 実施日時 2014年2月12日（水） 10:00～12:00

(4) 実施会場 1号館5階 大会議室

(5) 参加者 短大能率科教員 14名

短大事務部職員 13名

(6) 研修資料

i. 平成25年度自己点検報告書（基準Ⅰ、基準Ⅱ、選択的評価基準）

ii. 第三者評価結果

2. 研修内容の要約

(1) 10:00～ 研修のねらい（学長）

2013年度は第三者評価に明け暮れたが、評価結果において評価してもらえる部分は評価してもらえたと考えている。今回の研修では第三者評価結果の確認を行いたい。第三者評価は7年に1回受けなければならないが、本学は2回目である。第三者評価は第三者の視点を生かして問題提起をしていただき、その提言内容を改善に活用するものである。今後は教員も職員も評価員をできる力量があるか否かが、その力量を左右する評価軸になるだろう。自分が改革を経験していなければ、評価する力も養えない。欧米に比べて日本は評価の歴史が浅いので、評価基準はこれからも変わっていくことが考えられる。こうした進化についていく問題意識を持ってほしい。

(2) 10:10～ 評価基準について（ALO）

評価基準は「建学の精神と教育の効果」「教育課程と学生支援」「教育資源と財的資源」「リーダーシップとガバナンス」の4つの分野に分かれている。他に選択的評価基準があり、これは教育活動の特色をアピールのための項目である。この観点にしたがって自己点検報告書を記述する。この中で教育の質の保証という点でⅠ－B「教育の効果」の項目は重要である。Ⅱ－A「教育課程」では学習成果の査定を客観的評価に耐えうるよう行っているかが評価のポイントとなる。

(3) 10:20～ 評価結果について (FDセンター長)

4人のチームで書面調査を行い、その結果を元に現地調査の実施となる。調査結果を報告書にまとめ、それを要約したものが今回お渡しした機関別評価結果(案)である。

総評で確認すると本学は教育目的が明確であり、実現のための方策が明確である点が評価されている。また質的・量的な評価方法が確立していると判断され、継続的に改善が行える体制が整備されていると評価されている。学生支援についてはアカデミックアドバイザー制度が評価されている。学習成果を達成する上で必要なキャンパスアメニティが整備されている。事務組織の責任体制も明確である。FD・SDの体制も評価されている。

特に優れた点として、建学の精神が浸透しているところ、到達目標とその判定がしっかりとされていること。その他の調査によりしっかりと質の保証がなされていることもある。教職員の連携も本学の特徴である。卒業後プラス3サポートの試みも評価されている。

向上充実の課題は通信教育の学習成果の把握であるが、その点では改善の試みがなされており、その点が評価員に伝わらなかった憾みがある。その点ではアドミッションポリシーへの指摘も同様である。キャリア教育はコースとしてのまとまりを評価されている。

(4) 10:35～ グループ討議

第三者評価結果を受けて、本学の教育・運営について討議を行った。

(5) 11:40～ 発表(3分×4グループ)

<教員>

評価結果を確認して、本学の教育について考え直すきっかけになった。ビジネス実務の経験者が教員をしていることを評価しているが、そうしたバックグラウンドをもつ人間がどのような努力を重ねているかについてもフォーカスをあててもらいたい。組織力、教員力が重要であると考え、教職員の連携は特筆すべきである。正しく評価するためには評価する側の経験も重要であろう。本学の教育制度は体系的に整っていると考えられるが、特色としてもっとふれられていてもよいだろう。活動はキーワードになっていると評価してもらいやすい。エビデンスとしての資料が揃っていることも重要である。

教育面での学生支援で考えると、態度面、基礎学力面などから補習を行うが、単位の認定で強制力をもったものにすべきである。卒業レポートを出す時点で能力不足が明確になることがあるので、その前にアカデミックアドバイザーからの指導が必要である。さらに優秀な学生については、自由科目の活用が考えられる。

<職員>

FD・SDが教職員全体で取り組まれている点について、他大学をリードしていると考えられる。知識重視でなく改善提案がなされるようなグループ活動が主体となっている点も評価できる。教員との連携も重要である。個人としての能力向上にSDは寄与しているが、組織にどのようにつながっているかは、疑問な点もある。今後のSD活動はテーマ選びが重要であると考え。専門性、課題形成力の向上に焦点をあてたい。

報告書の完成レベルは高い。キーワードがわかりやすく示されているが、逆に抽象的にとらえられてしまう面もあった。SD活動に関しては、今後とも継続させていくべきである。今後の能力向上につながるような活動にしていきたい。知識・スキルの向上を検討していきたい。来年度に関しては課題形成力が中心となる。来年の活動の推進にあたってPDCAサイクルを確立していきたい。

(6) 11:50～ まとめ（事務部長）

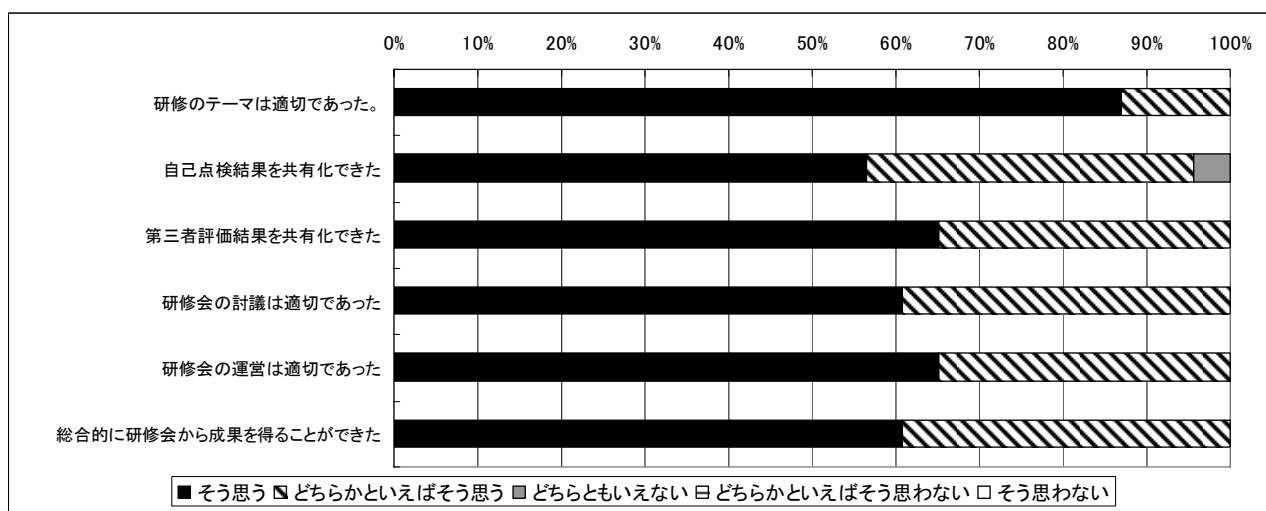
評価員として他学の評価をした経験からまとめを述べたい。第三者評価は教育の質の保証をどう行っているか、主体的な改革・改善が実施できているか、また大学の活動が社会から支持を受けているかの3つのポイントとなる。評価は154の観点があるが、それらをすべて評価しなければならない。そのエビデンスも確認する必要がある。ただ評価するだけでなく向上・充実の支援をしなければならない。私が担当した大学でも組織的対応はされていたが、課題を明確にしても、その課題の解決策を打ち出すにはいたっていない。その点では本学は様々な解決策が取り組まれている。本学の評価結果をみてもしっかり評価されている。客観的に評価できるようになることで、より見えてくるものがあると考えられる。

3. 研修後のアンケート集計結果

アンケートの集計結果は以下の図に示すとおりである。研修会に対し概ね肯定的な評価が得られた。特にテーマの選定に関しては多数の同意が得られた。本アンケートから、第三者評価結果について共有化することができたと判断できる。

FD・SD研修会アンケート結果

回答者数 23名



	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
研修のテーマは適切であった。	20	3	0	0	0
自己点検結果を共有化できた	13	9	1	0	0
第三者評価結果を共有化できた	15	8	0	0	0
研修会の討議は適切であった	14	9	0	0	0
研修会の運営は適切であった	15	8	0	0	0
総合的に研修会から成果を得ることができた	14	9	0	0	0



Ⅲ－２． 授業参観結果報告

F D委員会 授業参観・授業評価小委員会 池内健治

1. 授業参観の沿革および目的

本学では、2002年度に専任教員のみを対象に授業参観を試行し、翌2003年度には対象を兼任教員にも拡大して、現在のような授業参観を開始した。授業参観の目的は、授業参観結果を基に授業方法などに関して、被参観者と参観者が意見を交換し、授業の品質保証をおこなうことである。

2. 授業参観実施の流れ

- (1) F D委員会が本年度の参観者リストを作成する。
- (2) 被参観者と参観者が相談して、授業参観の日程を決める。
- (3) 被参観者は、事前に、当日のレッスンプラン（授業の計画）を参観者に提出する。
- (4) 参観者は、レッスンプランを参考に、参観結果に関する簡単なレポートを作成しつつ、授業参観をおこなう。授業参観終了後、当該レポートに基づき、被参観者と参観者が授業を振り返り、意見交換する。
- (5) 参観者は、授業参観レポートを完成し、F D委員長に報告する。
- (6) 1年間の参観結果をまとめ、主務者がF D委員会および教授会で報告し、「F Dレポート」に報告書を掲載する。
- (7) 提出された授業参観結果は、F D委員会で保管する。

3. 授業参観と振り返りの視点

授業参観終了後の振り返りでは、主として次に挙げる項目について意見交換をおこなう。

- (1) 授業の構成（授業デザイン）
 - シラバスの学習目標を達成する内容になっているか
 - レッスンプランの構成（授業の流れ）が適切であるか
 - 授業の事前準備は適切か
- (2) 授業の内容
 - 講義・実習・演習は、学習目標達成に効果があったか
 - 学生の理解を促進する工夫があったか
 - 授業の意図・強調する点が、学生に伝わったか
- (3) コミュニケーション
 - 学生に伝わりやすい話し方や言葉遣いであったか
 - 学生の反応を捉えながら話していたか
 - 対象の学生に合わせたコミュニケーション上の工夫があったか
 - 一人ひとりの学生が理解できるように指導していたか
- (4) 設備の活用
 - 黒板・プロジェクタなどの設備を、授業目的にあわせて効果的に使っていたか
- (5) テキストや配布資料

テキストを効果的に使っていたか
配布資料は、量・質ともに適切だったか
テキストや配布資料は、適切に使われていたか

(6) 宿題・課題

宿題や課題の指示は、適切に伝わっていたか

(7) その他

授業担当者の授業に対する考え・意識していることや意見
授業運営に関して、問題点や本学への要望

4. 授業参観対象者

授業参観対象者 3名

授業参観者（本学専任教員） 3名

No.	参観科目	実施日	授業担当者	授業参観者
1	プロジェクト実務の進め方	2013/11/26	関憲治	齋藤勇二
2	チーム学習へのステップ	2013/10/02	豊田雄彦	風戸修子
3	会計ソフトの基本	2013/0710	長島弘	豊田雄彦

5. 参観結果

本年度の授業参観によると、授業担当の教員は授業内容・授業方法・授業運営の面で工夫して、学生の学習成果をあげる努力をしていることがわかった。授業参観後の意見交換をおこない、授業担当者と参観者がともに授業に関する問題意識を共有できるなどの効果があった。

意見交換の内容として、就職活動で欠席した学生に対してフォローのため授業の進行が遅れることに対する対応、グループワークで学習成果を上げるための工夫などがあがった。授業参観を通じて、これらの課題を授業担当者と参観者が話し合い、改善方法を見いだすことができた。

Ⅲ－３．授業評価結果報告

F D委員会 授業参観・授業評価小委員会 豊田雄彦

1. 本学における授業評価

本学では、1993年度から学生による授業評価を実施してきた。2013年度の授業評価は第21回目となる。教員の実施率を向上し、授業の質の向上をめざして改善を加えながら継続的に実施してきた。なお2012年度より第Ⅱ部の募集停止にともない、第Ⅰ部のみ授業評価を実施している。

(1) 教員の実施率

2013年度の実施率は、教員全体で100%となった。専任教員、兼任教員ともに予定されたすべての授業評価が実施された。

(2) 実施件数

2013年度の授業調査の実施件数（調査票の数）は1708件であった。学生一人あたりの実施回数は、2.67回となった。

表1 実施件数推移

	年度	2013	2012	2011	2010	2009	2008	2007	2006	2005	2004
第Ⅰ部	実施延べ人数	1708	3007	3260	3677	3357	3222	4322	3876	3495	3789
	在籍人数	640	829	878	960	955	936	940	879	868	843
	学生1人当り実施回数	2.67	3.63	3.71	3.83	3.52	3.44	4.60	4.4	4.0	4.5
第Ⅱ部	実施延べ人数	-	-	572	986	1260	1270	1097	1134	1439	1400
	学生の在籍人数	-	-	82	142	174	176	173	170	205	197
	学生1人当の実施回数	-	-	6.98	6.94	7.24	7.22	6.3	6.7	7.0	7.1
全体	実施延べ人数	1708	3007	3832	4663	4617	4492	5419	5010	4934	5189
	在籍人数	640	829	960	1102	1129	1112	1113	1049	1073	1040
	学生1人当り実施回数	2.67	3.63	3.99	4.23	4.09	4.04	4.9	4.8	4.6	5.0

2. 授業評価の目的

本学の授業評価の目的は、調査用紙のはじめに、次のように明記されている。「この調査は、『大学の授業をより効果的、魅力的なものにするためにはどうすればよいか』を目的に実施するものです。あなたの率直な意見を書いてください。直接成績評価にはまったく影響しません」。このように、科目プログラムの改善や教員の教授能力の向上のために行われている。そのため授業評価の集計結果は、次学期初めまでに各教員へ個別にフィードバックされる。また科目研究や授業研究のために、同一科目で複数のクラスで実施されている科目や複数の教員が担当する科目について、授業評価を実施することもある。この集計結果は科目主務者および担当者の中で検討され、次年度の科目開発に役立てている。

3. 授業評価の方法

(1) 実施時期

前期開講科目	7月（最終授業または最終授業の1回前の授業）
後期・通年開講科目	1月（最終授業または最終授業の1回前の授業）
集中授業	授業の最終日

(2) 授業評価の実施プロセス

5月中旬	全教員へお知らせおよび「調査届出書」の配布 (専任教員は、この届出書に、MBOに関わる調査科目か否かを明記する)
6月	「授業調査届出書」の提出（前期・後期ともに一斉提出）
7月	前期開講科目の授業調査実施 (各教員が授業の終了時に調査用紙を配布・実施・回収、教務課へ提出) ただし、授業評価の結果を MBO の基準に設定している専任教員の授業評価は、事務部の職員によって、授業評価調査票の配布・回収を行っている。
8月	前期分の集計
9月	前期集計結果報告・個別調査票の返却
12月～1月	後期・通年開講科目の授業調査実施
2月	後期分の集計・集計結果報告・個別調査票の返却

(3) 授業評価の質問項目

現在行われている授業評価の質問項目は下記の10項目である。

1. わたしは、この授業に意欲的に取り組んだ。
2. この授業は、学習目的やねらいがハッキリしていたと思いますか。
3. 教員は、わかりやすく教える工夫をしていたと思いますか。
4. テキストや教材は学習に適切なものとだと思いますか。
5. 授業の進め方のスピードは、理解するのに適切であったと思いますか。
6. 教員は学生の参加（質問・発言・課題提出など）を促したと思いますか。
7. この授業や課題の学習を通じて、学習目標は達成できたと思いますか。
8. あなたは、この授業を全体として、よい授業であったと思いますか。
9. この授業のよい点を具体的に自由に記述してください。（自由記述）
10. この授業の改善点を具体的に自由に記述してください。（自由記述）

1993年授業評価をスタートした時点では、A群（全科目共通質問項目）とB群（科目別質問項目）に分かれており、A群は18項目共通、B群は20項目まで自由に設定可能な質問項目に設計されていた。

1999年度に授業評価質問項目に関して、質問項目を18項目から8項目に絞り込み、調査票を一種類に統一した。その後継続してこの質問項目で実施している。

4. 授業評価結果の概要

(1) 学生の評価

表 2 は、授業に対する学生からの評価の指標の推移を示している。「あなたは、この授業を全体として、よい授業であったと思いますか」という質問項目に対する回答を 5 ポイントスケールでとって、授業に対する評価の代表値として用いている。

2013 年度の評価ポイントの平均値は、4.20 となっている。

表 2 学生評価の推移

2013 年度	4.20
2012 年度	4.24
2011 年度	4.21
2010 年度	4.14
2009 年度	4.16
2008 年度	4.15
2007 年度	4.16
2006 年度	4.00
2005 年度	4.08
2004 年度	4.03

(2) 実施結果の開示

・ 教員への開示

全体の授業評価結果は、前期と後期に評価結果を質問項目ごとに集計している。集計結果を F D 委員会、教授会に報告して、授業の質を向上するための参考資料として活用している。

教員個人のクラス別集計結果は、全科目の集計結果とともに、個々の教員に返却される。教員は、質問項目ごとに自分の授業のスコアを全体のスコアと比較して、課題がどこにあるのかを理解することができる。自由記述欄への学生のコメントとともに、データを使い、授業改善の基礎データとして活用している。

F D として科目研究を行なっているチームには、学科長の了解のもとで科目ごとの集計結果データが供給され、チームは科目研究に活用している。

・ 学生への開示

授業評価結果は前期と後期で評価結果を項目ごとに集計している。集計結果は自由が丘産能短期大学のホームページおよび学内電子掲示板 (JANE) に掲示して、情報開示している。また後学期ガイダンスにおいて前学期実施分、2 年生ガイダンスにおいて通年の集計結果「授業評価アンケート 2013 年度通期集計結果について」(資料参照) を開示している。

5. 本年度の成果と今後の課題

(1) 本年度成果

昨年度に続き実施率が 100% となった。当然のことではあるが、完全実施のための各種施策が功を奏したと言える。

学生への情報開示に関しては、2011 年度学生の声懇談会の学生の声を受けて、ホームページ、電子掲示板等にただ掲示するだけでなく、ガイダンスで告知を行うようになった。また 2013 年度の学生の声懇談会においても集計結果について開示し、学生から授業実施への改善策の提言をもらった。

専任教員においては、授業評価の結果を受けて、「学生による授業評価に対する教員の受け止め」を記述してもらうこととした。記述内容は「コメント」および「改善のための方策」となっている。受け止めの内容については次項に列記する。

(2) 今後の課題

積年の課題であった実施率の向上に関しては一定の成果をみたので、ひきつづき完全実施をめざして、細心の注意をもって運営にあたることが重要である。情報開示に関しても一定の成果を得たが、今後とも積極的に情報の開示を行い、そこから得られる学生からのフィードバックを授業改善に結びつけるマネジメントサイクルの確立をはかっていくことが必要である。

授業評価アンケート 2013 年度通期集計結果について

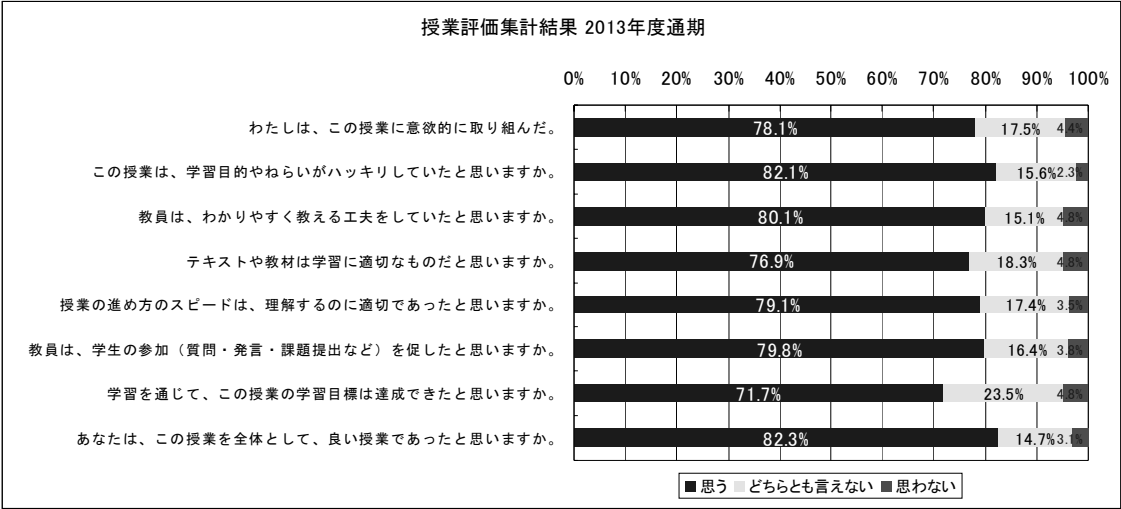
FD 委員会 授業評価担当

2013 年度授業評価（質問紙名称：「授業に関する調査」）の結果がまとまりましたので、ご報告いたします。ご協力いただいた学生の皆様に感謝いたします。

本学では授業の質の向上をめざして、改善を加えながら継続的に授業評価アンケートを実施しています。1993 年度から学生による授業評価を実施しており、2013 年度は第 21 回目となります。

最終的な教員別の実施率は 100%です。また総回答数は 64 クラス、1708 件となります。

授業評価の質問内容および回答状況は以下のグラフに示すとおりです。質問の回答は 5 段階（5：そう思う、4：ややそう思う、3：どちらともいえない、2：ややそう思わない、1：そう思わない）のうち 1 つを選択するものです。集計結果では 5 および 4 を「思う」、2 および 1 を「思わない」として集計しています。



全質問を総括する質問が「8. あなたは、この授業を全体として、よい授業であったと思いますか。」となります。質問 8 の最近 5 年間の平均値の推移（前期）は以下のとおりとなっています。概ね肯定的な回答が得られています。

2013 年	2012 年	2011 年	2010 年	2009 年
4. 20	4. 24	4. 21	4. 14	4. 16

以上

6. 学生による授業評価に対する教員の受け止め

配当学年	配当期	科目区分	コメント	改善のための方策
1年	前期	学習の基礎	すべての項目で評価が高かった。特に学生の積極的な参加に対する評価が高かった。追加教材等を工夫し、学生が活発なグループ討議を行えるようにしたことが評価につながったと考えられる。	新聞記事や文献資料を活用して、学生がより深いグループ討議を行えるよう、教材開発を工夫する。
2年	前期	現代キャリア教養	丁寧な体験のふりかえりをねらいとしたが、クラスの人数が多いこともあり、意欲にバラツキが見られ、目標に達成に対する評価も低かった。同じような演習を繰り返しているように感じてしまったことも原因と思われる。一方で自由記述のコメントには自己理解の促進が出来たという意見が多く見られ、プリントなどの教材に対する学生の評価も高かった。	学生がより学習目標を意識して取り組めるよう、各回のねらいをより丁寧に説明する。学生の人数によって授業内容を絞り、多様な学生が参加しやすい環境を作る。学習意欲の高い学生に対して追加の資料を準備する。
1年	前期	学習の基礎	例年と同じように指導したはずだが、今回の学生評価は以前より全体に低いものとなった。原因としては、皆があまりできていなかった要約でのつまずきと、同時に担当した「社会と人間を問う」のレポートが「文章表現」で学習したことを応用できておらず、多くの学生に低い評価点を与えたことが考えられる。	読書や文章を読む習慣がほとんど無いため、色々な書き方があることを十分理解できていない。書かせるだけでなく、手本となる文章を読ませるのも一つの方法ではないかと考える。
1年	前期	学習の基礎	授業スケジュール並びにマニュアルに沿って運営したが、学生の満足度が高かった。これは教員のハンドリングというよりは、授業課題の負担が少ないこと、学生が自己主張できる機会があること、講義形式ではないこと等が関係している。	プレゼンテーション技術の達成度を学生自身の内省的な評価（自己満足度評価）で図ることは難しいので、異なる評価軸が必要かもしれない。
1年	前期	学習の基礎	他クラスに比べ、質疑応答が不十分だったり、お互いが遠慮してコメントが出ない場面が多かったりした。できるだけ学生同士が活発にコメントをし合うよう、教員からのコメントを控えたが、それが物足りないと感じた学生がいた。	クラス・学生によって積極性や受け止め方が異なるため、学生の気質をみながらきめ細かな対応をするように努める。
2年	前期	コース専門必修	就職活動のために、欠席・早退をする学生が多かったためか、「授業に意欲的に取り組んだ」に対する評価が低かった。グループによって課題を分担する時期が異なっていたことも取り組みに差異が生じたと原因と思われる。授業外でも学生の授業準備のためのサポートを行ったため「参加を促した」の評価が高くなった。	学生本人の意欲を継続して高めていかれる工夫をする。授業時間の中で、効率的なグループミーティングが行われるようにグループ時間の確保を固定化する。利用施設（演習室）のマイク状況などが最適に使用できるように情報センターに依頼する。

配当学年	配当期	科目区分	コメント	改善のための方策
2年	前期	コース専門必修	学生の取り組みが 90.0%と極めて高いことを除けば、どの項目も平均よりかなり低い結果となった。旅行会社のカウンター演習を中心とする授業に切り替えた当初にも授業評価を行い、かなり高い評価を得たことから、やや意外であった。課題がやや難しく、学生の変化が授業内容にマッチしなくなったと考えられる。	学生同士の旅行に対する隠された要望を引き出すという、カウンター対応の目標が明確でなく、どこまで聞き出せば達成できたかどうかの基準をはっきりと提示できていなかったのが、最大の問題であったと推測される。きめ細かな教材作りを心がける必要がある。
2年	前期	コース専門	2年次のExcelの授業であるため、学生のスキルに差があることが予想されたが、授業中の学生の様子および授業評価の結果を見ると概ね満足できる到達度に達成できたようである。ただ選択科目であるため、Excelのスキルが十分でない学生は履修を敬遠している可能性もあり、コース目標全体の到達度から考えると課題は残る。	自由記述の内容も概ね肯定的なものであったが、「進度が速い」という学生もわずかではあるがいたため、授業の進行により一層の注意が必要であると感じた。ただ大半の学生は授業についていけているので、そうした学生に無駄な時間を作らせないように、フォローが必要な学生の指定席をつくるなどの工夫が必要である。
2年	前期	コース専門	マーケティングは概念の部分が多いため、授業の多くを講義中心にして進めてきた。そのため、90分の授業時間を学生がしっかりと学習する気力がもたなかったように思われる。事例研究は生き活きとしていたのだが。	グループワークの時間を増やすことが必要と思われる。
2年	前期	コース専門必修	評価項目2項の「学習目的やねらいがハッキリしていた」の部分の評価が比較的低かった。これは扱った項目が多かったためと思われる。また、学習目標の達成度の部分も高いとはいえない点が反省材料である。全体としては、学生の授業への取り組みも良く、各学生の成果物も授業で想定したレベルに達していたと思う。	評価項目2項の「学習目的やねらいがハッキリしていた」部分の評価が比較的低かった事に関しては、もっと授業の項目を絞って実施することが必要だと思う。また、学習目標の達成度に関しては、客観的にはかなり達成していたので、学生へのフィードバックをより充実させ、自信を持たせることができるように努力する必要があると考える。
2年	前期	コース専門	各回の授業において、学生の理解の状況を考慮しながらも、教えなければならぬ項目も多い上、2年次前期科目であるため就職活動等による遅刻欠席も多く、また前回の内容が各回の基本となる積上科目であるため、進行速度の点ではシラバスどおりには行かないことが多かった。	就活による欠席者のフォローを考える。

配当 学年	配当期	科目区分	コメント	改善のための方策
1年	後期	現代キャリア 教養	全般的に、学生からの評価は高かった。就職活動の準備としての授業という特性を持つ科目であるため、学生のモチベーションが高く、学習内容のねらいも分かりやすいからではないかと考えられる。特に、面接練習や履歴書作成演習に関して、「よかった」「ためになった」というコメントが多かった。	「この授業の改善点」として、教室の狭さをあげている学生が多かった。面接演習などの際は、もっと間隔をあけて緊張感を持って取り組みたかったという点がある理由としてあげられている。授業の実施内容と施設面(配当する教室の大きさ)のマッチングを、事務部と相談しながら行うとともに、制約のあるスペースの中で、より効果的な演習の方法を検討する。
1年	後期	現代キャリア 教養	説明を分かりやすくするため、具体例やエピソードを取り入れた授業を心がけた。また、授業に対する学生の反応を確認しながら、積極的に発言や質問がしやすいような雰囲気作りに努めてきた。しかし、それらが必ずしも全ての学生の学習意欲を高めるまでには至らなかったものと受け止めている。	引き続き授業に対する学生の反応を確認しながら、また、課題提出状況などを考慮し、授業に意欲的に取り組めていない学生に対するフォローを行なっていくように心がける。
1年	後期	コース専門 必修	本授業の趣旨を説明して演習に入ったが、学生の理解が不十分であった。全学生に演習の目的や内容を十分に理解させることなく演習を進めてしまった。そのため、全項目について学生の評価が低かった。本授業を長く担当しているが、このクラスについて達成度が低い。授業運営、チーム分けなど工夫を要すると考える。	授業改善の方策として、2つあげる。第1は、学生に授業の学習目標を繰り返し徹底して伝えることである。第2は、演習の進め方について、学習の動機づけを高めるための工夫を行うことである。具体的には、目標の設定よりも実践のウエイトを高める、一度出来た成果物を中間評価して、それを改善させるなど、担当するクラスの学生にあわせた授業運営を行う必要がある。
1年	後期	コース専門 必修	秘書と医療スタッフという2つのテーマを盛り込んだ授業だったため、学習目的については100%の学生がハッキリと捉えていたものの、医療に興味が無い学生の医療に関わる授業部分に対する意欲が低く、結果として学習目標の達成度が低くなった。	秘書と医療スタッフという方向性の異なる2つのテーマを盛り込んだ授業内容に無理が無かったかを再検討し、場合によっては2科目に分ける。医療に関心の無い学生が無理なく授業に参加できるように、医療の専門的な知識が必要な内容は扱わないようにする。

配当 学年	配当期	科目区分	コメント	改善のための方策
1年	後期	社会・仕事の基本技能	学年共通の科目であり、昨年度までの「ビジネス文書表現」を改訂した内容として、教員側では十分な準備で臨むことが出来た。課題指示の際も事例を豊富化した。毎回の授業冒頭で前回の提出課題を返却して、その単元で学んだ内容についての注意点を説明した。当日の単元では、課題を明確に指示した上で、学生が充分に実習できるように時間を設けた。学生は「この授業に真剣に取り組んだ」と回答しているが、教員もその通りの様子を観察していた。	履修者が1限設定のため少人数となったが、早い時限でも履修しようとする学生の意欲が高く、教室の雰囲気よかった。毎回、1つの主題での課題に取り組む内容が学生には分かりやすく、また取り組みやすかった様子。やや説明に時間不足な回もあり、「少し早い」というコメントを書いている学生も見られたので、今後はさらに個々の理解を確認しながら進める必要がある。

Ⅲ－４．学外におけるFD活動報告 教育研究推進センター

1. 本学における学外でのFD活動

自由が丘産能短期大学のFD活動は授業参観や学内研修会に留まらず、学外におけるFD活動にも力を入れている。

本学の2013年度学外FD活動の内容も、様々な公的な協会の運営、大学教育等に関するフォーラム、シンポジウム、各種研究会への参加など多岐にわたっている。このような活動には、受講者として参加するだけでなく発表者・報告者としての参加が含まれている。

本学の活動の目的は、以下のような点に集約することができる。

- (1) 本学の取組みを広く社会に公表し、他大学等の参考に資するとともにフィードバックを受けてFDを活性化させることを目指す。
- (2) 他大学等とFD活動の交流を図り、大学の教育・研究活動の向上に寄与することを希求する。

2. 2013年度 学外でのFD活動実績

(1) 講師等としての参加

イベント名称	主催者	開催日	開催場所	参加者	参加形態
課題解決型学習の実践事例研究会	全国大学実務教育協会	9月6日	アルカディア市ヶ谷	森脇道子	運営
秋季フォーラム	東京都私立短期大学協会	11月26日	アルカディア市ヶ谷	関憲治	講師
理事長協議会	日本私立短期大学協会	12月2日	アルカディア市ヶ谷	森脇道子	運営

(2) 受講者としての参加

イベント名称	主催者	開催日	開催場所	参加者	参加形態
春季フォーラム	東京都私立短期大学協会	5月7日	アルカディア市ヶ谷	森脇道子 池内健治 江崎和夫 風戸修子 関憲治 鹿沼行央 三好匡	受講
キャリアコンサルティング技能検定に関わる特例講習	キャリア・コンサルティング協議会	6月8日	飯田橋レインボービル	山田純	受講

イベント名称	主催者	開催日	開催場所	参加者	参加形態
大学改革フォーラム2013 大学教育の未来を探る	大学改革フォーラム 実行委員会	8月9日	明治大学	森脇道子 池内健治 関憲治	受講
大学等におけるキャリア 教育実践講習	キャリア・コンサル ティング協議会	8月19日～ 8月20日	日本産業カウンセラ ー協会	金子隆文	受講
大学等におけるキャリア 教育実践講習	キャリア・コンサル ティング協議会	8月23日	ヨコハマジャスト 1 号	関憲治	受講
アクションラーニングの 基礎を2日間で学ぶ	統合共育研究所	8月24日～ 8月25日	かながわサイエン スパーク	池内健治	受講
課題解決型学習の実践 事例研究会	全国大学実務協 会	9月6日	アルカディア市ヶ谷	風戸修子 佐野達	受講
市民で創る地域包括ケ ア	福祉フォーラム・ジ ャパン	10月6日	一橋大学	小野洋子	受講
私立短大教務担当者研 修会	私学研修福祉会	10月21日～ 10月23日	大阪ガーデンパレ ス	木谷みちる	受講
秋季フォーラム	東京都私立短期 大学協会	11月26日	アルカディア市ヶ谷	森脇道子 池内健治 風戸修子	受講
私立短大学生生活指導 担当者研修会	私学研修福祉会	11月27日～ 11月29日	岐阜都ホテル	松井豊	受講
理事長協議会	日本私立短期大 学協会	12月2日	アルカディア市ヶ谷	鹿沼行央	受講
FDフォーラム	大学コンソーシア ム京都	2月22日～ 2月23日	龍谷大学	三浦智恵子	受講
平成26年度からの第三 者評価に向けたパネル ディスカッション	東京都私立短期 大学協会	3月6日	アルカディア市ヶ谷	池内健治 江崎和夫 風戸修子 関憲治 三好匡 中山幸子	受講

Ⅲ－５． ＳＤ活動報告

ＳＤ推進委員会 鹿沼行央

１．活動目標とねらい

短大事務部のＳＤ活動は、「研修会を中心としたＳＤ活動」、「課ごとの勉強会を中心としたＳＤ活動」、「課を横断するチームで取り組む重点課題解決活動」の３つの活動を設定し、事務職員を対象とした管理運営や教育・研究支援までを含めた大学職員としての資質向上を活動目標としている。これらの活動はいずれも、事務職員の知識・能力・スキルを向上させ、役割に応じた能力開発を促している。

また、この３つの活動はＳＤ推進委員会が中心となって組織的に取り組み、短大事務部全体で推進している。

２．活動の概要

(１) 研修会を中心としたＳＤ活動

毎年、教員と連携して実施するＦＤ・ＳＤ研修会は、短期大学基準協会の第三者評価を今年度を受審することから研修テーマを、自己点検・評価に関する内容で実施することにした。テーマを「第三者評価結果の受け止めと共有化」とした。「第三者評価結果（内示）」をもとに、教学事項に関する自己点検・評価結果報告書の内容を共有化することによって、次年度の活動に結びつけることを研修目的とした。研修会は次のとおり実施した。

- ①研修テーマ： 「2013年度に受審した第三者評価の受け止めと共有化」
- ②参加人員： 職員13名、教員14名
- ③研修日時： 2014年2月12日（水）10:00～12:00
- ④会場： 1号館5階 大会議室

(２) 課ごとの勉強会を中心としたＳＤ活動

教務課と学生総合サービスセンターは、次のテーマを設定して活動した。

i. 教務課：「高等教育の諸問題と本学」

職員一人ひとりが、担当業務の知見拡大および今後の学内での活用を目的に、高等教育に係るさまざまなテーマを一項目選び（改正労働契約法、中高一貫教育、秋入学、科学研究費助成事業、奨学金）、第三者に説明でき意見が持てるレベルのレポートにまとめた。中間および最終報告会を開いて、調査方法・結果・論考について討議する勉強会を実施した。

ii. 学生総合：「短期大学設置基準から学生支援のあり方を捉える」

短大職員としての知識向上をはかることを目的に、職員全員が「設置基準」「寄付行為」「規

程」「学則」をテーマに調べ、テーマごとの勉強会を実施した。

(3) 課を横断するチームで取り組む重点課題解決活動

今年度、短大事務部は5課体制から2課体制に組織が変更となり職員数が減少したが、前年度に引き続き、4つの活動（「内部統制に関する各課運用方法のチェック」「短大の防災体制の再構築」「短大の防犯体制の充実」「SD活動推進とFDとの連携」）を設定して、それぞれの活動は、責任者（課長）のリーダーシップのもと、主務者をサポートして活動した。

i. 内部統制に関する各課運用方法のチェック

6つの内部管理の項目を、2課職員の実施状況を分析し、2課が相互にチェックする体制を整え、互いの作業をチェックして標準化し、遺漏のない処理を実施した。

ii. 短大の防災体制の再構築

新設された防災管理規程および再編された新たな大学・短大分隊組織による教職員と学生参加の防災訓練（12/10）を実施し、新体制化で役割・連携を確認した。結果は短大ホームページに公表した。学生は防災訓練に加え、ガイダンスで配布した「大地震対応マニュアル」を活用した安否確認メール送受信訓練（12/11）も実施した。

iii. 短大の防犯体制の充実

玉川警察署の支援のもと、2課の防犯担当者を中心に教職員向けの防犯研修会（11/6）を実施した。今年は110番通報のロールプレイングを実践して、不審者侵入時の対応の再確認を行い、防犯に対する意識向上を図った。

iv. SD活動推進とFDとの連携

教育研究推進センターと連携して、「第三者評価」をテーマとしたFD・SD研修会（2月12日に開催）を運営した。研修会実施後に、研修の振り返りを企画して、2月20日に実施した。

3. 活動結果

(1) 研修会を中心としたSD活動

2014年2月12日に開催した研修会は、「第三者評価結果の受け止めと共有化」をテーマに、教員と職員を別々のグループに編成してグループディスカッションを実施した。職員のグループは、「自己点検・評価報告書（一部抜粋）」と短期大学基準協会から内示された「機関別評価結果（案）」を事前に配布して、各自が記述内容を読み込み、事前学習を行った。当日のグループワークは、事務組織の活動として評価されたSD活動の認識と次年度以降のSD活動のあり方をディスカッションしてまとめ、グループごとに発表した。

2月20日の事務部ミーティングの後に、研修会で発表した研修の振り返りを実施した。これま

で短大事務部が取り組んできたSD活動の目的と成果を再確認して、今後のSD活動の具体的な活動のあり方を職員全員が共有化することができた。

(2) 課ごとの勉強会を中心としたSD活動

各課長が活動結果をPDCAシートにまとめ、中間報告を11月4開催の管理職定例会で実施した。最終報告は3月4日の管理職定例会で活動結果を報告して、今後の課題を共有化した。

i. 教務課：「高等教育の諸問題と本学」

職場で担当している実務と社会・教育界の話題を関連付けて調べることにより、自身の業務の意義を再確認し、今後の取り組み課題および本学の方向性を考えることができた。また、一つのテーマに関して収集した情報を偏りなくまとめること、および大学職員としての問題意識と意見・考えを持つことの重要性を体得した。

ii. 学生総合：「短期大学設置基準から学生支援のあり方を捉える」

4つのテーマごとに勉強会を実施したことにより、本学の組織や運用を体系的に理解することができ、内部統制の重要性や担当業務の目的がより明確になり、業務に活かすことができた。また、他大学や学部と本学の違いを比較して現状を把握することで課題解決につながる糸口を見出した。

(3) 課を横断するチームで取り組む重点課題解決活動

各活動の主務者が活動結果をPDCAシートにまとめ、中間報告を10月24日開催の事務部ミーティングで実施した。最終報告は3月5日と3月13日に活動報告会を開催して、職員全員が活動結果の報告を受け、今後の課題を共有化した。

また、各活動の重点課題を理解するためにSD勉強会を実施して、その背景や取り組み状況、今後の課題を職員全員が共有化した。実施したSD勉強会は次のとおり。

- ①新たな防災組織 (12/05)
- ②防犯意識の向上 (02/27)
- ③内部統制の強化 (02/05)

4. 今後の課題

(1) 研修会を中心としたSD活動

教員と連携して実施するFD・SD研修会は、毎年、教員と職員が共通するテーマを選定して実施してきた。これからも、教員と職員との協働関係を一層強化するため、職員はSDを推進して専門性の向上をはかり、大学改革を推進していく上で必要となる能力や知識が身につく研修テーマを選定して実施することが課題となる。

(2) 課ごとの勉強会を中心としたSD活動

2014年度末をもって、短大事務部の組織は廃止となり、職員にとって2014年度の業務は、通常業務のほかに終結業務と移管業務が加わり、執務に余裕をなくすことを予想する。しかし、SD活動は継続して実施することにより、職員の能力向上につながるので、活動を鈍らせないように、職員各自が自覚をもって、高等教育に関するテーマで活動を推進することが課題となる。

(3) 課を横断するチームで取り組む重点課題解決活動

短大事務部が、長年取り組んできた重点施策を継続して実施するとともに、PDCAサイクルによる重点活動を、上級職員のリーダーシップのもとで課題形成力に焦点をあてたOJTを実施することが課題となる。

Ⅲ－６． 研究助成報告 研究助成委員会

本学は、年度末に研究助成結果報告会を開催している。実施内容は次のとおりである。

日時：2014年3月14日（金） 10：00－12：30

担当：研究助成委員会

■委託研究

No.	テーマ	リーダー、メンバー
1	学習成果の評価方法とまとめに関する研究	リーダー：池内健治 メンバー：関憲治、風戸修子、豊田雄彦、石嶺ちづる、佐野達
2	中小企業の採用基準と学生の就業体験の実態調査	リーダー：関憲治 メンバー：江崎和夫、池内健治、伊藤敦、長島弘
3	就業体験学習（ビジネスマナーコンテスト）実践研究	リーダー：江崎和夫 メンバー：風戸修子、齋藤勇二、藤原由美、三浦智恵子

■自由研究

No.	テーマ	担当
1	自由が丘産能短期大学における司書教育の歩み	平田泰子
2	就職活動における家族の役割	竹内美香
3	地域医療支援システム研究	伊藤敦

IV. FD調查報告

IV. 第 I 部卒業時学生調査報告

FD委員会 授業参観・授業評価小委員会 三浦智恵子

調査概要

(1) 調査の目的

自由が丘産能短期大学では、学生の学習成果および学生生活満足度に関する調査を、最終学年の学生を対象に1994年から毎年、実施している。この「卒業時学生調査（学習成果・学生生活満足度）」（正式名称は「短大教育に関するアンケート調査」、2010年度まで通称「学生満足度調査」）は、本学全体の評価、学生自身の本学での目標や意識の実状、学習成果、本学のカリキュラム、教育内容、サービス、および設備などの教育システム全体に関する評価を問うものである。

調査の目的は、本学の教育システム全般をより一層、充実させることにある。すなわち調査結果を用いて実状を把握し、その上で多様化する学生のニーズに合った授業プログラム、教職員の教育環境の提供、学生の質の向上のための課題などを抽出することにより、本学が学生にとってさらに質の高い大学になるように、本調査結果を活用することである。

なお、本調査の実施、回収、集計および報告のとりまとめ等は、FD委員会のFD調査グループが担当した。

(2) 調査対象者

第 I 部 2年生

(3) 調査期間

2013年12月11日～18日

(4) 調査方法

「実務学習研究」（必修科目）において調査票用紙を配布し、自答式で学生が記入した後に回収した。

(5) 回収率

87.9% (357名/406名)

(6) 回答者の属性（コース別）

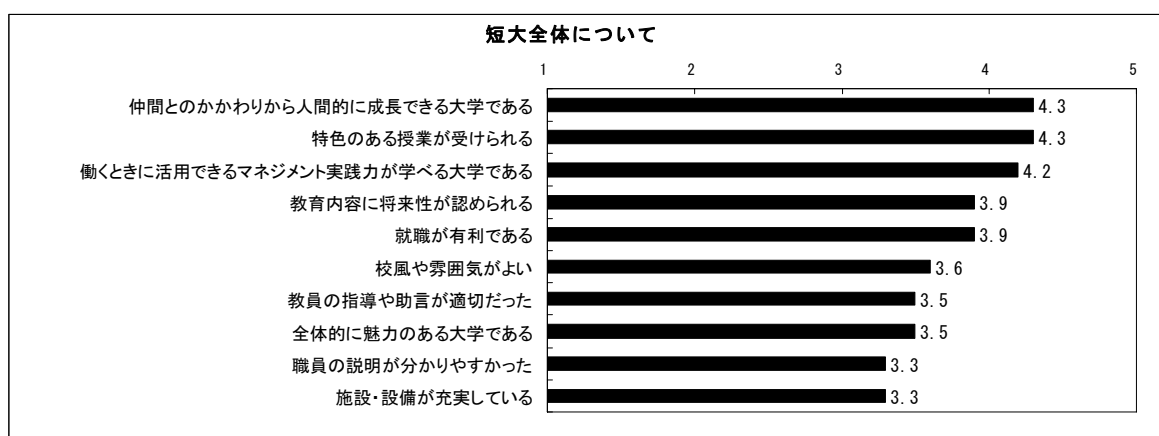
コース別	回答者数	割合(%)
ビジネスマネジメントコース	68	19.0%
秘書コース	33	9.2%
観光・国際コース	72	20.2%
医療・情報サービスコース	66	18.5%
メディアデザインコース	22	6.2%
経営情報コース	55	15.4%
サービス・マーケティングコース	37	10.4%
無回答	4	1.1%
非該当	0	0.0%
	357	100.0%

(7) 評価および達成度に関する設問の回答項目

評価に関する設問の回答の大半は、5件法により、「5: と思う」、「4: ややと思う」、「3: どちらともいえない」、「2: あまりそう思わない」、「1: そう思わない」の項目を用いて調べており、各項目の評価点を、「評価平均値 = { (5×人数) + (4×人数) + (3×人数) + (2×人数) + (1×人数) } ÷ (回答人数)」という式により算出している。ただし、当該数値の算出においては、無回答を計算から除く。なお、設問21の回答項目については、「5: かなり達成できた」、「4: 達成できた」、「3: どちらともいえない」、「2: あまり達成できなかった」、「1: 達成できなかった」と定めている。

1. 短大全体への評価

短大全体についての学生の評価を、項目別に検討する。まず「仲間とのかかわりから人間的に成長できる大学である」「特色のある授業が受けられる」という項目は4.3で最も高い評価であり、「働くときに活用できるマネジメント実践力が学べる大学である」が4.2と続く。これらの3項目は、近年毎回上位を占めており、本学の教育目標や特色ある実践的な授業に関して、学生の評価が高いことが分かる。



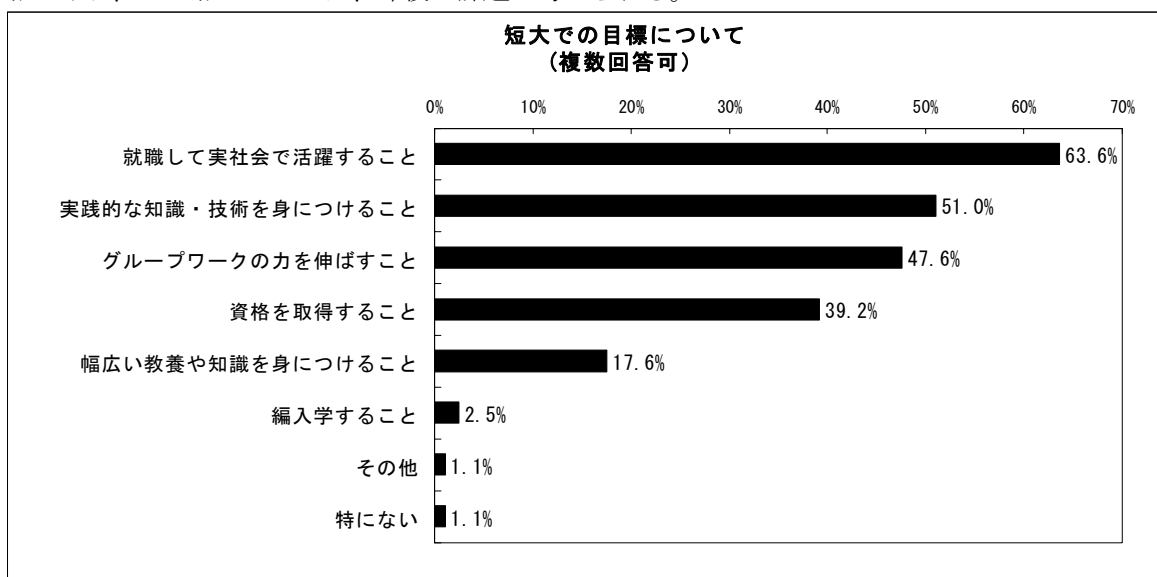
2. 学習成果

(1) 短大での目標

短大での目標、および身につけたかった能力に関する設問への学生の回答は、本学への入学の動機や魅力に繋がる。

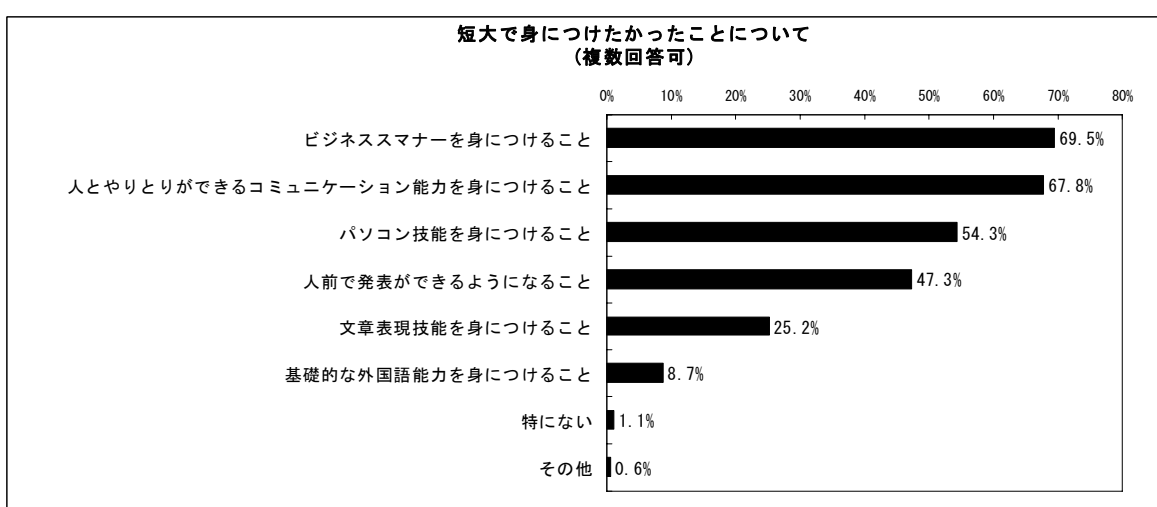
短大での目標については、「就職して実社会で活躍すること」が、全回答者の63.6%を占める最高率である。「実践的な知識・技術を身につけること」(51.0%)、「グループワークの力を伸ばすこと」(47.6%)が次いで高くなっており、特に、「グループワークの力を伸ばすこと」は前回調査より0.9ポイント増加した。これは、「グループワークを取り入れた授業が多く、その中でビジネス実務能力を身につけ、就職を目指す」ことに特色のある本学に、強い目的意識を持った学生が入学していることを反映しているといえる。

しかし、一方で、「幅広い教養や知識を身につけること」は前回調査よりも2.0ポイントの減少で、ここ数年逡減している。就業力の一つとして、幅広い教養を併せて身につけることも重要な視点であり、この点については、今後の課題と考えられる。



次に、短大で身につけたかった能力の回答を用いて、実践的な知識・技術の具体例を検討する。従来どおり、「ビジネスマナーを身につけること」が最も多い回答となっており、全回答者の69.5%を占めている。次いで、「人とやりとりができるコミュニケーション能力を身につけること」が67.8%、「パソコン技能を身につけること」が54.3%と続いている。

特に、「人とやりとりができるコミュニケーション能力を身につけること」は、前回調査より4.8ポイント上昇している。コミュニケーション能力は、いうまでもなく、今、社会で求められている能力であり、多くの企業が採用時に重要視している能力要素である。この調査結果から、学生は、基本的なビジネス実務やコミュニケーション能力を習得することにより、就職活動や就職後に活用しようとしていることがわかる。

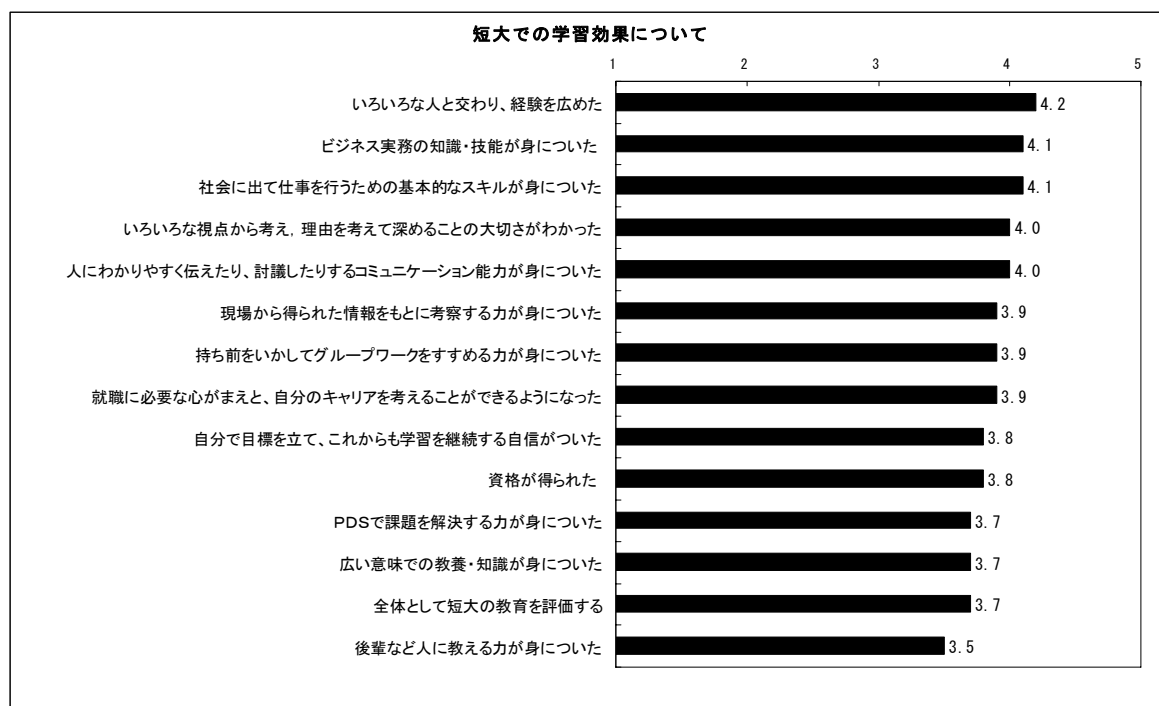


(2) 短大での学習効果

短大での教育を通じた学習効果について検討する。最も高い項目は、「いろいろな人と交わり、経験を広めた」であり、4.2の評価となっている。次に評価が高い項目は、「ビジネス実務の知識・技能が身についた」「社会に出て仕事を行うための基本的なスキルが身についた」の4.1である。さらに、「いろいろな視点から考え、理由を考えて深めることの大切さがわかった」「人にわかりやすく伝えたり、討議したりするコミュニケーション能力が身についた」の4.0と続く。

調査対象の学生の多くが、人とかかわることにより、コミュニケーション能力が習得できた、また、社会に出てから必要となる基本的なビジネス実務の知識やスキルを身につけることができた、と評価している。この結果は、前項目の「短大での目標」および「短大で身につけたかったこと」の調査結果と合致する。学生は、入学時において考えた「本学で学ぶ目的」に対して、2年間の正課内正課外の活動を通じて主体的に取り組む、一定の学習成果につながっていると考えることができる。

一方、相対的に低いのは、「後輩など人に教える力が身についた」の3.5の評価である。本学では、1年次に履修する「人に教える実務学習法」という科目で人に教える基本を学び、2年次の「学びのサポートⅡ」という科目の中で、後輩である1年生に対し、テーマに沿ってマネジメントの基礎を教える「実務学習会」を行っている。他の大学などと比較して、正課の授業の中で後輩などに教える機会がある分、人に教えることの難しさを痛感することも多く、この項目についてより厳格な自己評価をしているとも考えられる。



(3) 到達目標について

本学は、学則および学位授与の方針の中で明示している育成する人材像にもとづき、5つの到達目標（学習・教育目標、以下「大目標」）を設定している。「目標1. 大学の学びのための基礎能力」、「目標2. 社会・仕事の基本技能」、「目標3. ビジネス実務能力」、「目標4. 現代社会を生きる力」、

および自由設定目標である。なお、5つ目の自由設定目標は、本調査では設問を設定していないため、検討も割愛する。

次の別表1から別表4に挙げるように、4つの各大大目標は、最大9つの「具体的な学習目標」（以下「細目標」）で構成されている。本学の学生は、「私の到達目標」というシートを活用し、大学が掲げている到達目標にあわせて、自分なりの目標とその目標に到達するための方策を立案する。具体的には、入学時を第1回目として、自らの学習の達成水準をみるために細分化した学習目標から重点目標を選択し、達成のための方策を立案し、「私の到達目標」シートにまとめる。さらに、各学期の終わりに、自らが立案した方策に基づき、ふりかえりを行い、達成度を自己評価する。そして、次学期の初めに、各目標の達成度を加味しながら新たな目標を再設定する、というPDSサイクルを回しながら、成長を遂げていく。

本調査における「到達目標に対する学習成果」の計測は、学生が自ら設定した最後の到達目標（2年次後学期初めに設定）の達成度を、短期大学2年間の学習終了時に評価したものである。学生は、達成度の回答項目として、「5：かなり達成できた」、「4：達成できた」、「3：どちらともいえない」、「2：あまり達成できなかった」、「1：達成できなかった」のいずれかを選択している。

【別表1】「私の到達目標1(大学の学びのための基礎能力)」

具体的な学習目標	
1- A	現場から学ぶフィールドワーク力
1- B	多面的に深く考察する力
1- C	倫理観をもって現代社会を考える力
1- D	多様な人と対話する力
1- E	質問によって理解を深める力
1- F	チームで学習活動ができる力
1- G	ピアサポートによってともに学ぶ力
1- H	自らの学習に向けた目標設定力
1- I	課題を明確化し探求する基礎力

【別表2】「私の到達目標2(社会・仕事の基本技能)」

具体的な学習目標	
2- A	社会生活に必要なマナーを実践する力
2- B	文章を読み・人の話を聞いて重要なポイントを理解する力
2- C	自分の考えを読み手に伝わる文章で表現する力
2- D	自分の考えを聞き手にあわせて発表する力
2- E	数字を正確に扱い活用する力
2- F	パソコンや新しい情報通信機器を操作・活用する力
2- G	基礎的な外国語を使って他国の人に自分から関わる力

【別表3】「私の到達目標3(ビジネス実務能力)」

	具体的な学習目標	
3- 0- a	能率の考えに基づくマネジメントの基礎知識	全コース共通
3- 0- b	責任感と思いやりをもって人と関わっていくビジネス・マインド	
3- 0- c	ビジネス実務の実践力	
3- 0- d	実務を人に教えともに学ぶ力	
3- 1- a	業務マネジメントに関する知識	ビジネスマネジメント
3- 1- b	プロジェクト活動を推進するための知識	
3- 1- c	オフィスサービス分野で多様な人々と共に働くコミュニケーションスキル	
3- 1- d	マネジメント力を活用するスキル	
3- 2- a	上司とのペアワークを中心とした秘書の仕事の知識	秘書
3- 2- b	ビジネス秘書や医療秘書などの秘書的業務に関する知識	
3- 2- c	文書作成やファイリングなどの情報業務スキル	
3- 2- d	対人業務を円滑に行うためのコミュニケーションスキル	
3- 3- a	観光および観光産業に関する知識	観光・国際
3- 3- b	ホスピタリティについてのさまざまな視点からの知識	
3- 3- c	ホスピタリティ・マインドをもって相手に寄り添うコミュニケーションスキル	
3- 3- d	サービス品質の向上を意識し、仕事のあり方を見直すスキル	
3- 4- a	医療スタッフの仕事の内容と流れに関する知識と理解	医療・情報サービス
3- 4- b	医療事務、医療制度に関する知識と理解	
3- 4- c	医療事務スキルとともに、医事コンピュータを使って正確なレセプトを作成できる力	
3- 4- d	医療窓口での接遇力や効果的なビジネスコミュニケーションを行えるスキル	
3- 5- a	情報デザインに関する知識	メディアデザイン
3- 5- b	パソコン、ネットワークなど作品制作に関する知識	
3- 5- c	デジタルデータを作成・編集するスキル	
3- 5- d	作品をチームで制作するスキル	
3- 6- a	仕事とパソコンの知識	経営情報
3- 6- b	情報を仕事に活用するための知識	
3- 6- c	情報表現のスキル	
3- 6- d	チームでコミュニケーションをとるスキル	
3- 7- a	サービス実務の現場で業務を実践するための知識	サービス・マーケティング
3- 7- b	サービス実務を工夫・改善するための知識	
3- 7- c	サービス現場で顧客満足を創造する顧客対応力	
3- 7- d	協働により顧客満足を高める力	

【別表 4】「私の到達目標 4 (現代社会を生きる力)」

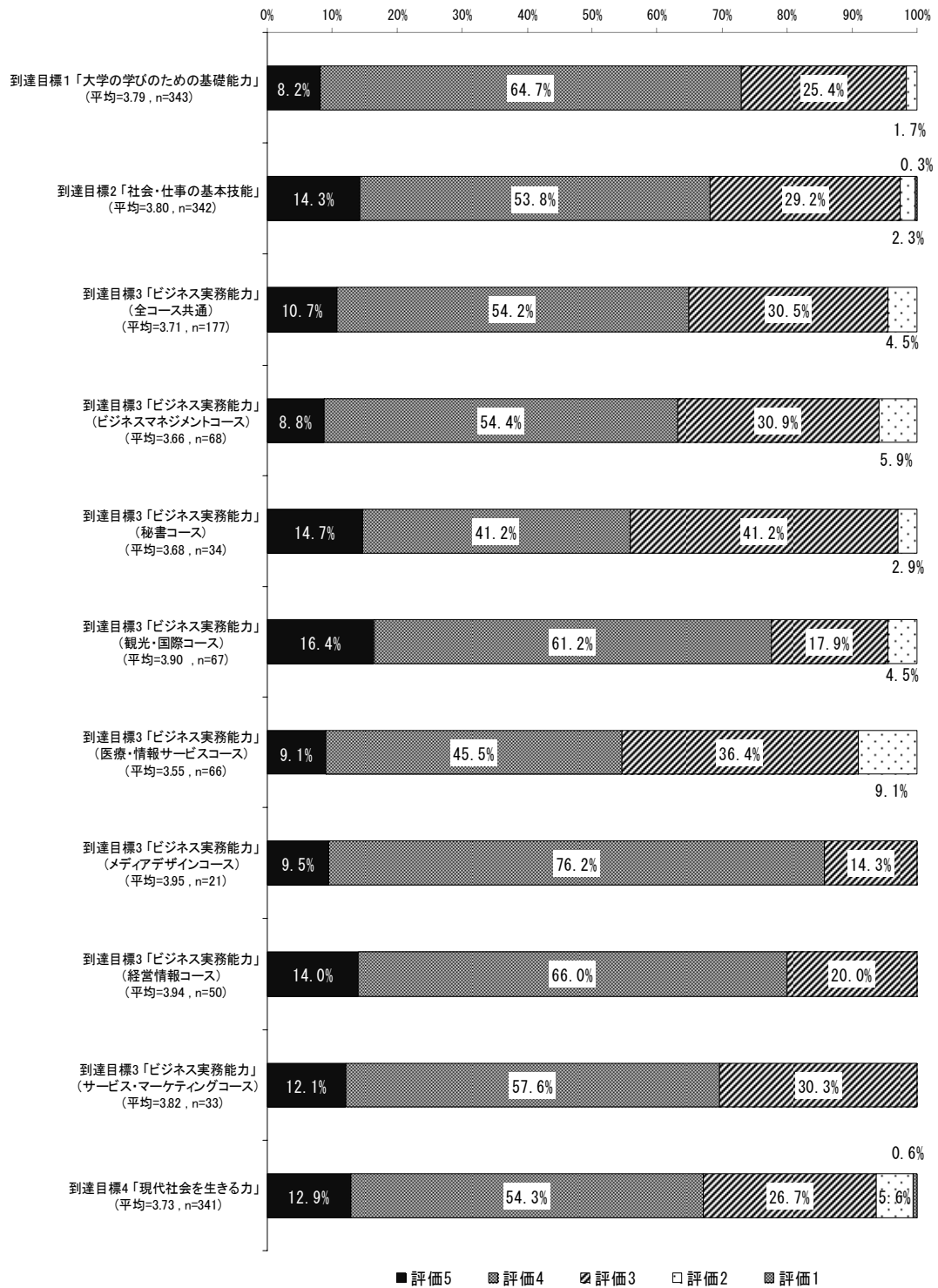
	具体的な学習目標
4- A	働くことができる自己管理能力
4- B	働く体験から持ちまえを活かす力
4- C	就業の現場で課題を解決する力
4- D	社会や地域の一員として責任とボランティア精神をもって行動する力
4- E	多様な視点をもって現代社会を見る力
4- F	働く体験から自ら課題を設定し学びを継続する力
4- G	働く体験から自分の就業力の現状をとらえ、高める意欲を持って行動する力
4- H	就業への問題意識をもって、自らのキャリアを考える力

大目標ごとの達成度について平均値でみると、「到達目標 1. 大学の学びのための基礎力」が 3.79、「到達目標 2. 社会・仕事の基本技能」が 3.80、「到達目標 3. ビジネス実務能力 (全コース共通)」が 3.71、「到達目標 4. 現代社会を生きる力」が 3.73 となっており、到達目標ごとの差はさほど大きくない。

なお、4 つの大目標ごとに、最も多くの学生が選択した細目標に関して、全学生に対する選択割合、および結果としての達成度の平均値を補足する。到達目標 1 については、全回答者のうち、「1-D. 多様な人と対話する力」を選択した学生が 26.2%で、達成度は 3.82 である。到達目標 2 は「2-A. 社会生活に必要なマナーを実践する力」が最も多く選択 (36.8%) されており、平均は 4.07 という結果になっている。到達目標 3 の全コース共通の細目標に関しては「3-0-d. 実務を人に教えともに学ぶ力」で 21.3%、3.55 の達成度、到達目標 4 は「4-A. 働くことができる自己管理能力」を選択した回答者が 34.7%を占め、平均 3.73 という達成度である。なお、前回調査で大目標ごとに最も多くの学生が選択した細目標と本調査で学生が選択した細目標は、到達目標 3 以外は同じである。

次に、「到達目標 3. ビジネス実務能力」に関して、コースごとに設定された細目標の達成度をみていく。コースごとに学習の特性や学習方法の違いもあり、また、コースごとの回答者数も異なるため、簡単に比較することはできないが、達成度の平均は、3.95 (メディアデザインコース) から 3.55 (医療・情報サービスコース) の範囲にあり、いずれのコースも同程度の達成度と考えることができる。また、回答項目のうち、「2: あまり達成できなかった」および「1: 達成できなかった」の合計に基づく達成できなかったとする割合は、全項目 1 割以内にとどまっている。

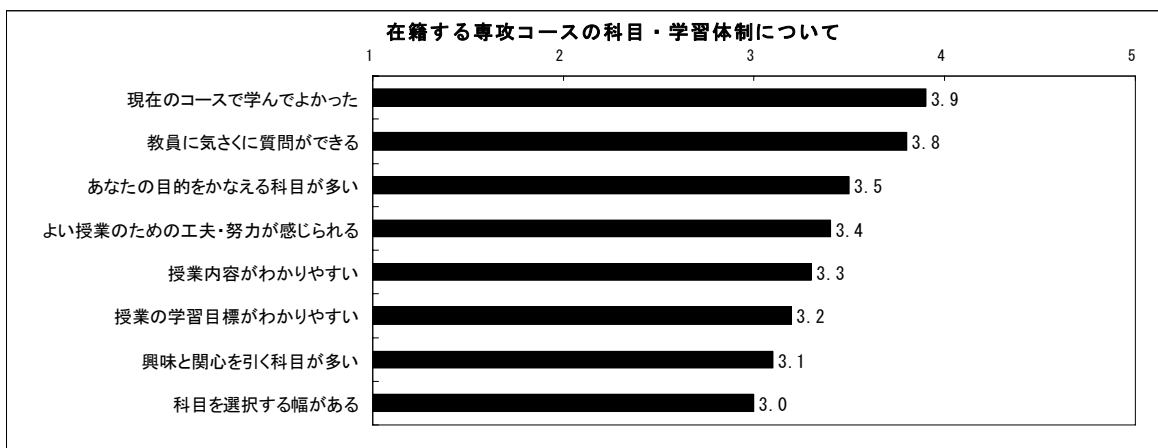
到達目標について



3. 正課学習

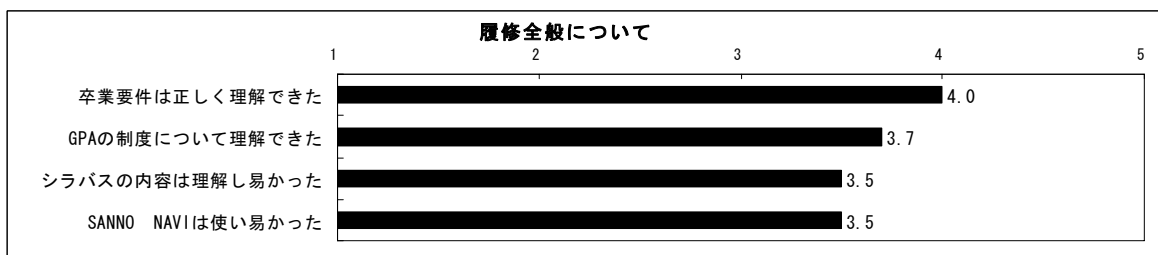
(1) 在籍するコースの学習体制および履修

学生が在籍するコースにおける学習体制および授業プログラムについては、「現在のコースで学んでよかったと思う」が3.9で最も高く、「教員に気さくに質問ができる」が3.8と続く。アカデミック・アドバイザー制度を含め、専任教員のみならず兼任教員においても、学生に丁寧に対応している結果といえるだろう。次いで、「あなたの目的をかなえる科目が多い」が3.5、「よい授業のための工夫・努力が感じられる」が3.4となっている。全般的に、学生が在籍するコースおよびその内容を高く評価しているといえる。



また履修全般のうち、特に「卒業要件は正しく理解できた」は4.0と高く、「GPAの制度について理解できた」が3.7、「シラバスの内容は理解し易かった」および「SANNONAVIは使い易かった」が3.5と評価されている。学生の実情に合わせて、シラバスおよび「SANNONAVI」を用いてガイダンスなどを展開し、教職員が当該事項の周知を図ってきたことの結果と考える。

「GPAの制度について理解できた」は、前回調査から0.1上昇している。昨年度より、前後学期の成績発表時に、学生が成績表をもとに到達目標（大目標）ごとの自分のGPAを計算し、自らの達成度をGPAと照らし合わせながら点検・評価するようにした。それによって、GPAの意味を、学生が身をもって理解できるようになったのではないかと考えられる。

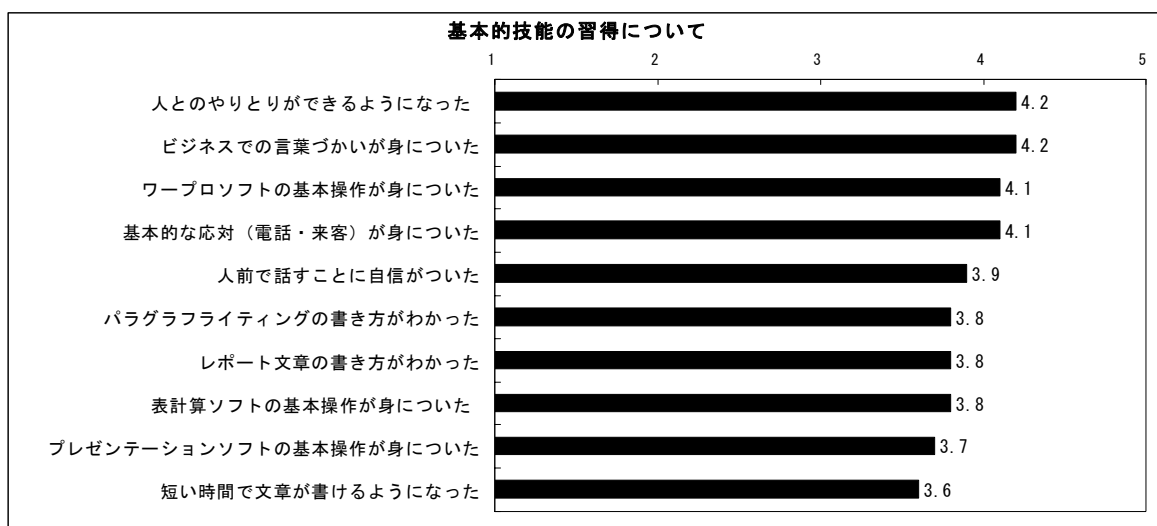


(2) 基本的技能の習得についての評価

学生が本学で身につけた基本的技能の最高評価は、「人とのやりとりができるようになった」「ビジネスでの言葉づかいが身についた」の4.2である。前者はグループワークを、後者は、評価4.1の「基本的な応対（電話・来客）が身についた」とあわせて、ビジネスマナーの授業に力を入れている本学の特徴が反映されている。

また、「ワープロソフトの基本操作が身についた」も4.1と高い評価となっている。学生全員が一人1台ずつノートパソコンを持ち、入学前からパソコンの基本的な使い方に関する授業を行い、また、LANや共有プリンタなど学内ネットワーク設備が充実している本学の実情をあらわしている。

他にも、「人前で話すことに自信がついた」（3.9）、「パラグラフライティングの書き方がわかった」「レポート文章の書き方がわかった」「表計算ソフトの基本操作が身についた」（いずれも3.8）といった項目の評価が高く、プレゼンテーションや文章作成の指導が、実践的な実務能力の習得に結びついているという結果となった。

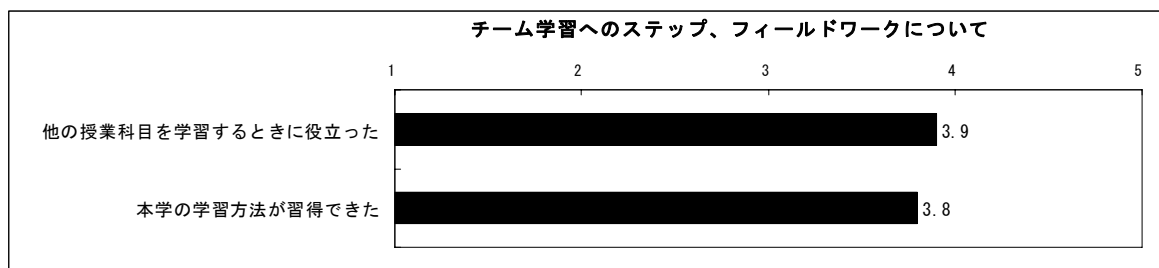


(3) 科目についての評価

①「チーム学習へのステップ」および「フィールドワーク」

「チーム学習へのステップ」および「フィールドワーク」は本学の「大学の学びの基礎」教育の中核を成す必修科目である。全コースの1年生が前者を前学期に履修し、その内容をさらに進化させて後者を後学期に修得する。具体的には、テーマの設定、チームでの討議、インタビュー項目の設定、インタビュー（インタビュー対象者は、「チーム学習へのステップ」の場合は、学内の先輩である2年生（当時）、「フィールドワーク」の場合は、企業などで働いている就業者である）、カード化、図解、結果の考察、プレゼンテーション、報告書作成などを行う。本学で開講されている授業科目の中でも、チームの中で個々人の能動的な取り組みが最も求められる科目といえる。両科目で学ぶ、インタビューやカード法、プレゼンテーション、チームでの協働などについては、1年次・2年次で履修する他科目の基礎となるスキルおよびマインドとなる。

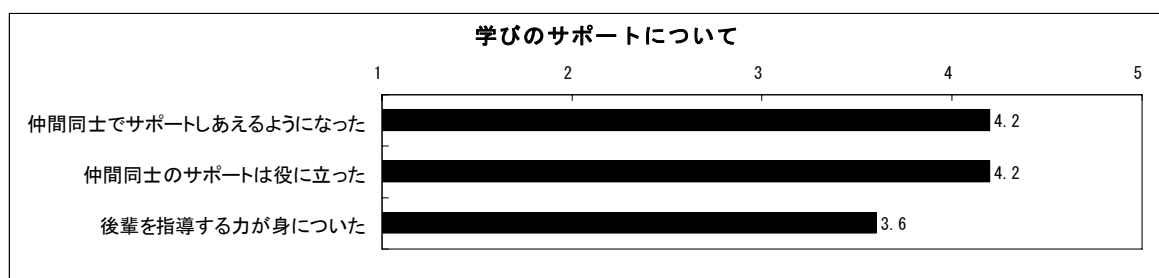
この両科目に関する設問の回答結果は、「他の授業科目を学習するときに役立った」が3.9、「本学の学習方法が習得できた」が3.8の評価となっている。学生自身、一定の手ごたえを感じていると考えられる。



②「学びのサポート」

「学びのサポート」は、2007年度に創設された科目であり、同学年同士がサポートしあうこと、また、先輩と後輩が授業内で交流し、合同で学び合うという特徴を持っている。「仲間同士でサポートしあえるようになった」「仲間同士のサポートは役に立った」の項目は評価が4.2と高い評価であった。

一方、「後輩を指導する力が身についた」は3.6である。「学びのサポート」では、2回ないし3回の授業回を使用し、「実務学習会」を実施している。「実務学習会」とは、「マネジメントの基礎（PDS サイクル）の学びを深める」というテーマで、2年生の企画運営のもと開催される、1年生に対する学習会である。2年生にとっては、後輩である1年生を教えるというはじめての体験をし、今まで気づけなかった課題が発見できたのではないかと考えられる。



③「ビジネスインターンシップ」

「ビジネスインターンシップ」は、多種多様な企業にご協力いただき、約2週間にわたるビジネスの現場で就業体験を行う科目である。加えて、学内において事前授業および事後授業として、ビジネス実務を学び、学内外でビジネス実務能力を習得していく実践的な科目である。「ビジネス現場の動きを実感できた」が4.2と最も高い評価であり、また、「受講してよかったと思う」という総合的な評価も、4.0と高い評価を示している。

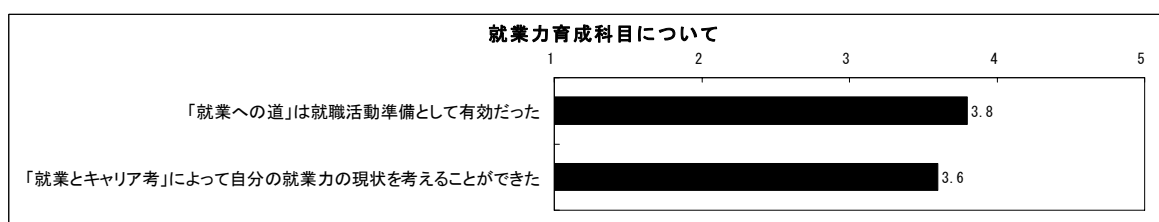


④就業力育成科目

就業力育成科目は2つある。1年次科目の「就業への道」は仕事や働くことの価値観を確認し、自らの言葉で表現することを学ぶ科目であり、評価は3.8であった。

また2年次科目の「就業とキャリア考」は、2012年度から創設された、隔週で実施される科目であり、3.6の評価である。下記⑤⑥の選択必修科目と一対となっており、⑤⑥で体験したことと、実際に就職活動などを行って感じたことなどを本科目で体系的に整理し、考えを深めていく。学生全員が履修する必修科目であり、学部の卒業論文に相当する「卒業レポート」を集大成としてまとめる。

なお、「卒業レポート」は2つの科目で作成する。「就業とキャリア考」が就業関連の集大成であり、「実務学習研究」が各専攻コースの専門科目の集大成である。



「就業とキャリア考」の授業がない隔週に実施される科目は、下記⑤⑥である。選択必修科目であり、「就業体験学習」あるいは「地域課題実践」のいずれかを履修する。他の科目と異なり、コースを横断したメンバーでクラスが編成されるという特徴がある。

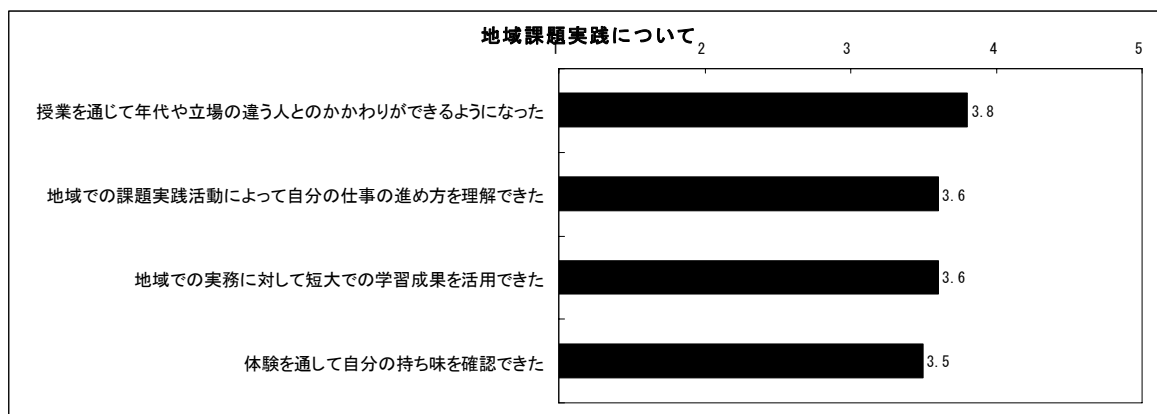
学生全体に対する履修者の配分は、次のとおりである。

就業力育成科目群	回答者数	割合(%)
地域課題実践	242	67.8%
就業体験学習	96	26.9%
無回答	18	5.0%
非該当	1	0.3%

⑤「地域課題実践」（選択必修科目1）

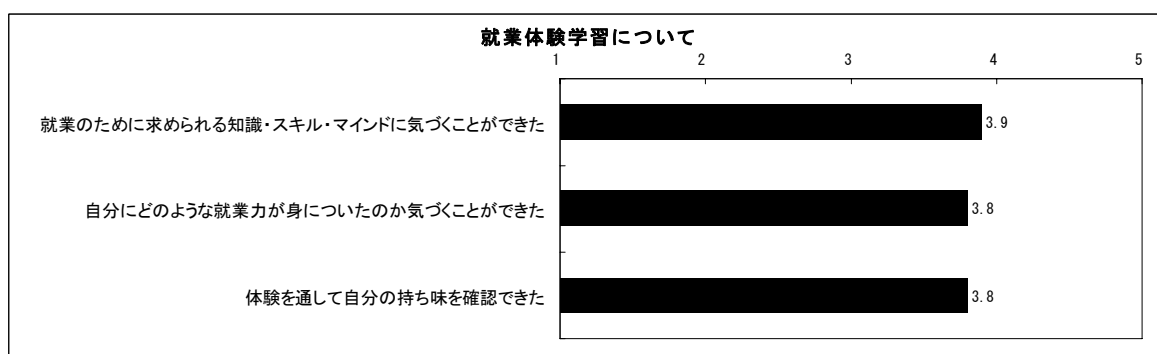
「地域課題実践」は、PBL（Project/Problem Based Learning）により、地域での課題を解決していく科目である。各クラス異なるプロジェクトを、本学近隣地域の商店街や各種団体、商店等から請け負い、学生が自分たちの力で課題解決していく。プロジェクトテーマを受けてから課題解決までのプロセスを通じて、働くための基本能力を身につけていく実践的な科目である。

「授業を通じて年代や立場の違う人とのかかわりができるようになった。」が最も高い評価で3.8であった。これまでの授業や生活ではかかわりのなかった、地域の方との交流は、学生にとって、「社会そのもの」や「働くということ」について見直す有益な機会だったと考えられる。なお、「地域での課題実践活動によって自分の仕事の進め方を理解できた。」「地域での実務に対して、短大での学習成果を活用できた」は、3.6の評価となっている。



⑥「就業体験学習」（選択必修科目 2）

「就業体験学習」は、各クラスに与えられたそれぞれのテーマに取り組み、就業に必要とされる能力を身につけ、伸ばすことを目的とした科目である。具体的には、クラス・チームで協力しあい、学内イベントの企画運営などを行う。「就業のために求められる知識・スキル・マインドについて気づくことができた」が3.9で最も高い評価であり、「自分にどのような就業力が身についたのか気づくことができた」「体験を通して自分の持ち味を確認できた」はともに3.8と、全体的に高い評価である。

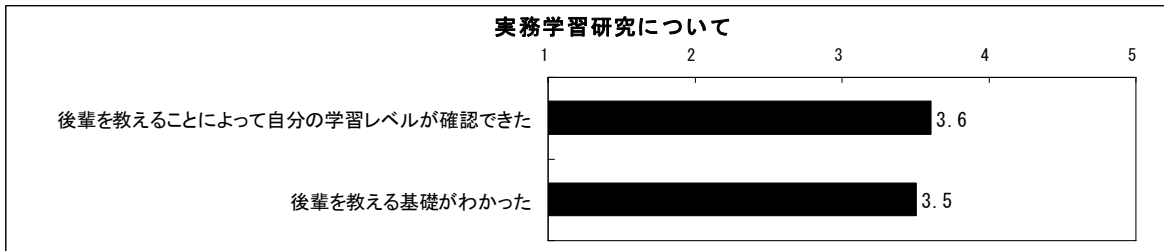


⑦「実務学習研究」

実務学習研究は、短期大学2年間の集大成ともいえる科目であり、「人に教える能力を高める」という具体的な学習目標に基づき2008年度から導入された。「実務学習会の企画・実施準備・ふりかえり」と「卒業レポートの作成」が、本科目の2本柱である。

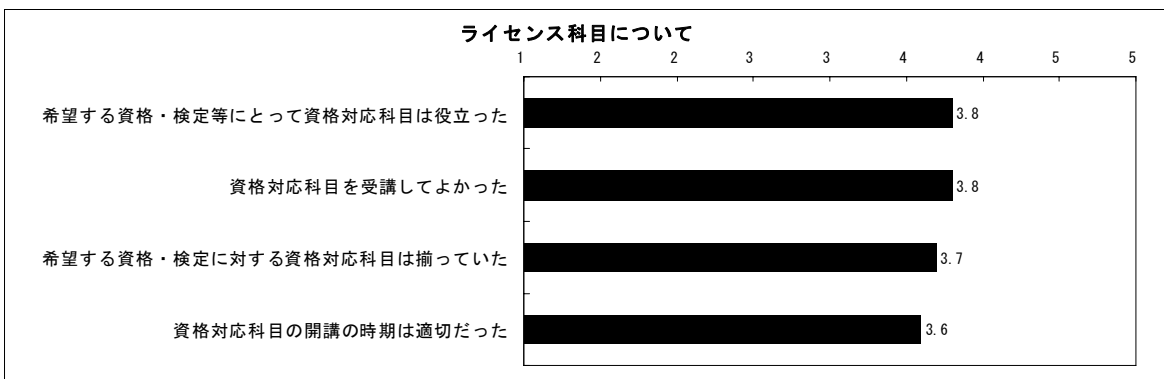
本科目では、2013年度は「マネジメントの基礎（PDSサイクル）の学びを深める」というテーマのもと、1年生に対して行う「実務学習会」を企画する。「実務学習会」そのものは、既述の通り「学びのサポート」の授業内で行うが、学習会の企画、教材作成、運営マニュアル作成、実施準備およびふりかえりは、本科目の中で学生自身が行う。また、2012年度から学生は2種類の卒業レポートを作成しているが、本科目は各専攻コースの集大成という位置づけの卒業レポートを作成する。

「後輩を教えることによって自分の学習レベルが確認できた」が3.6という評価である。人に教えることは、自分自身が学ぶことでもあるという点について、比較的多くの学生が理解できているといえる。

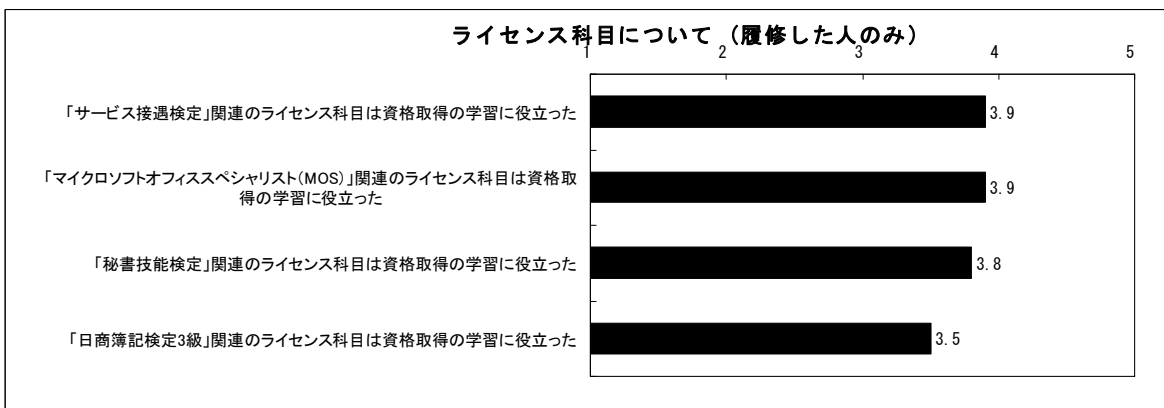


⑧ライセンス科目

ライセンス科目については、「希望する資格・検定等にとって資格対応科目は役立った」および、総体的評価の「資格対応科目を受講してよかった」が、3.8の評価で高かった。科目の充足、および開講時期に関しても、概ね同様の評価である。

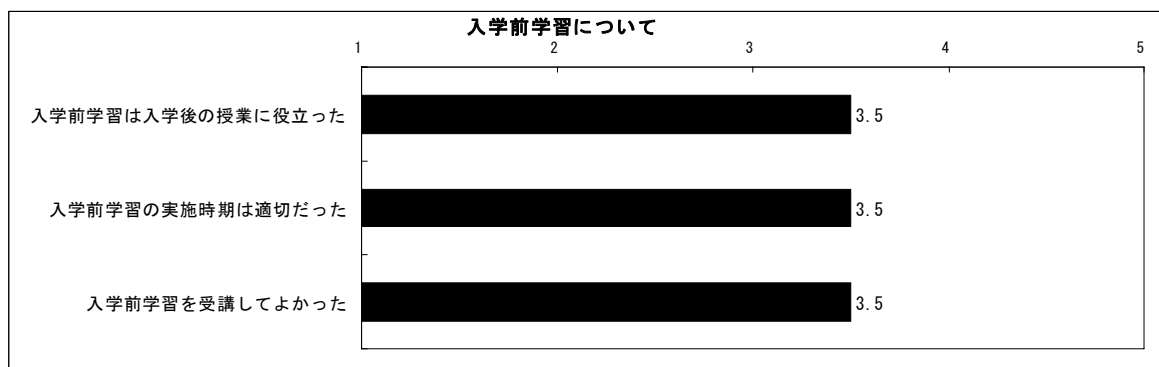


さらに個々の資格についてみると、「サービス接遇検定」および「マイクロソフトオフィススペシャリスト(MOS)」が3.9で最も高く、「秘書技能検定」が3.8と続く。これらの資格は、本学における基礎的能力に関連しており、科目として取り入れているビジネスマナーやパソコンスキルに直結する資格である。本学の学生はこれらの資格取得のモチベーションが高く、合格率も比較的高いため、資格対応科目が役立つととらえたと考えられる。



⑨「入学前学習」

入学前学習は、入学予定の高校生を対象に入学前年度の12月から数回行われる授業である。産能式ノートテイキング、文章作成の基礎、グループワークの基本、パソコンの基礎などについて講義および演習形式で実施されている。授業でのノートの取り方、入学後の文書作成やレポート課題に対応するための基本的な知識やパラグラフライティング、グループでの討議の仕方、本学の授業に必要なパソコンのスキルなどを習得するという内容である。

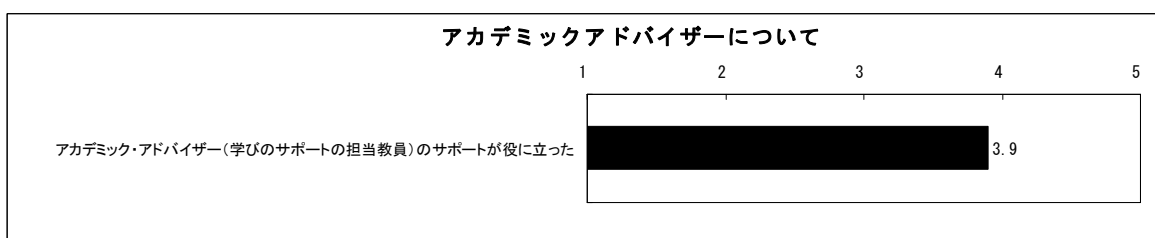


高校までの受動的な学習態度から大学の能動的な学習態度に切り替えるために必要な、基礎スキルを習得する重要な科目である。評価は、全項目3.5であり、入学前の学習を経て、入学後の学びにスムーズに移行したと考えているととらえることができる。

4. 正課外学習

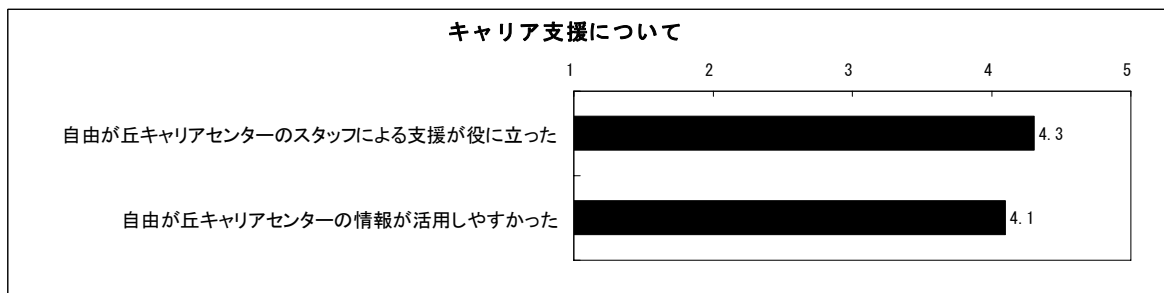
(1) アカデミック・アドバイザーについての評価

アカデミック・アドバイザーは、科目「学びのサポート」の担当教員のことである。学修に関するサポートや、その他個々の学生に対するさまざまなサポートの役割を担っている教員である。「アカデミック・アドバイザーのサポートが役に立った」の評価は3.9であり、学生とのコミュニケーションは円滑に行われているといえる。アカデミック・アドバイザーは、本来は、その名称の通り学修指導を中心とする役割であったが、実質的には、多様化する個々の学生への対応や、最も身近な教職員として就職活動に関する相談なども行っている。昨年同様、本設問の回答結果が比較的高い評価となっているのは、アカデミック・アドバイザーのサポート領域が実質的に拡大し、学生との接点が一層増えていることが背景にあるとも考えられる。



(2) キャリア支援についての評価

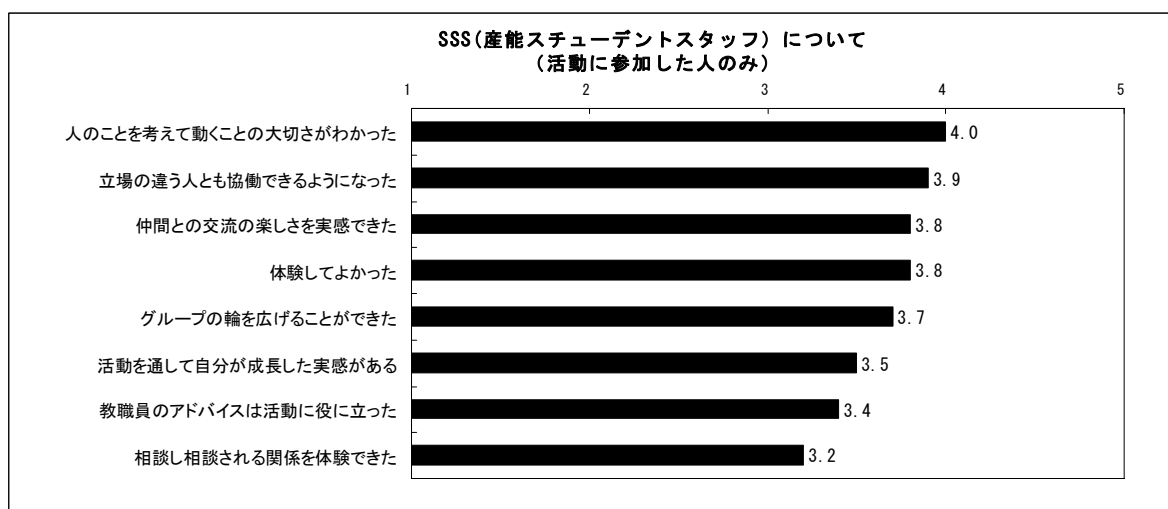
自由が丘キャリアセンターは、学生の就職支援を専門的に行うセンターであり、学生が在籍するコース別に、キャリア支援専従の職員がサポートをしている。「自由が丘キャリアセンターのスタッフによる支援が役に立った」の評価は、前回調査同様4.3と高い。就職情報発信という役割に対しても、「自由が丘キャリアセンターの情報が活用しやすかった」の評価が4.1と高い。新卒の就職をめぐる状況は、全国的にやや回復状況とはいわれているが、依然として就職難であることは変わらない。また、就職活動の第一歩を踏み出すことができない、途中でモチベーションが低下してしまう、といった学生も少なからず存在する。そのような状況にもかかわらず、本学が高い就職率を維持しているのは、自由が丘キャリアセンターにおいて有益な対応がなされているということであろう。



(3) SSS（産能チューデントスタッフ）活動についての評価

SSS活動は、新入生を対象にしたオリエンテーション、学内の美化や環境維持などに関するサービス活動、学外でのボランティア活動を、自ら志望した学生が2年間継続して行う正課外のサービスラーニング活動である。

「人のことを考えて動くことの大切さがわかった」が最も評価が高く、前回および前々回調査と同様、3年連続で4.0となっている。「人のことを考えて動く」ことは、サービスラーニング活動の根幹となるものであり、SSS活動を通じて、学内外の人とのかかわりを広げ協働することの大切さが認識できたことがわかる。また、「体験してよかった」という総合的評価も、3.8となっている。

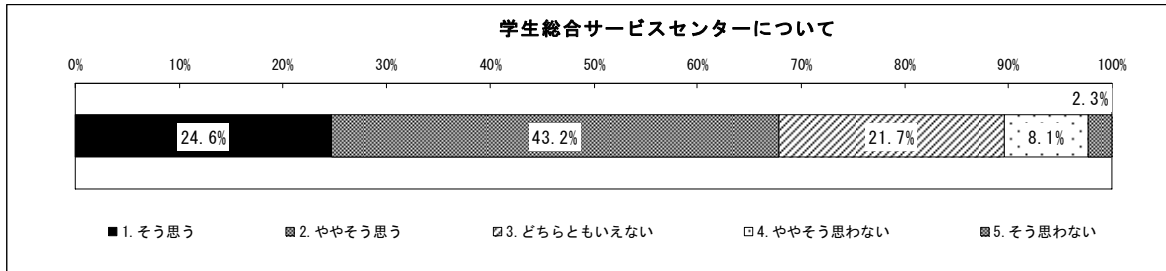


5. 学生生活

(1) 学生生活サポートについての評価

学生生活は、学生が学習を円滑に進めていくための土台である。そのために設けられた学内のセンターが「学生総合サービスセンター」であり、学生の窓口として専従の職員が対応している。

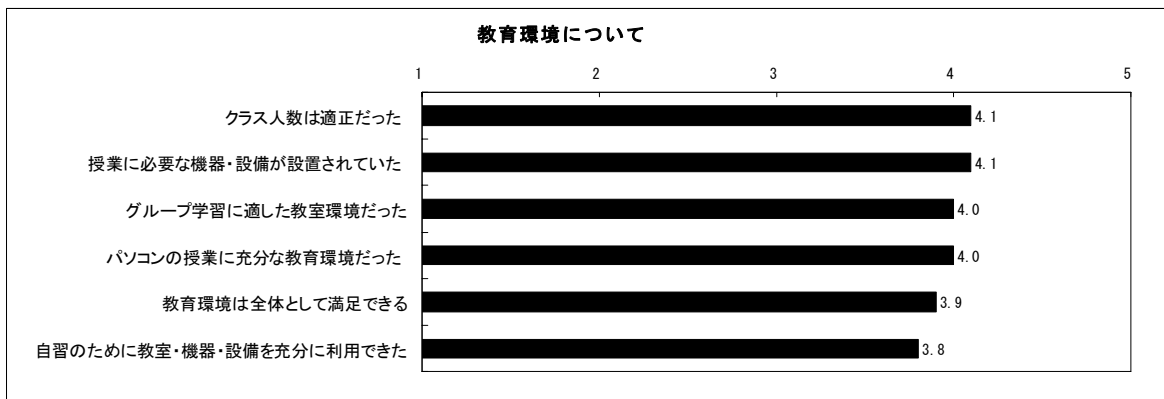
「学生総合サービスセンターのサービスが学生生活に役立ったか」は、3.8の評価であり、前回調査に比べ、0.1上昇している。学生の多様な問い合わせ全般に対して、きめこまかなサポートが行われていることがわかる。



(2) 教育環境についての評価

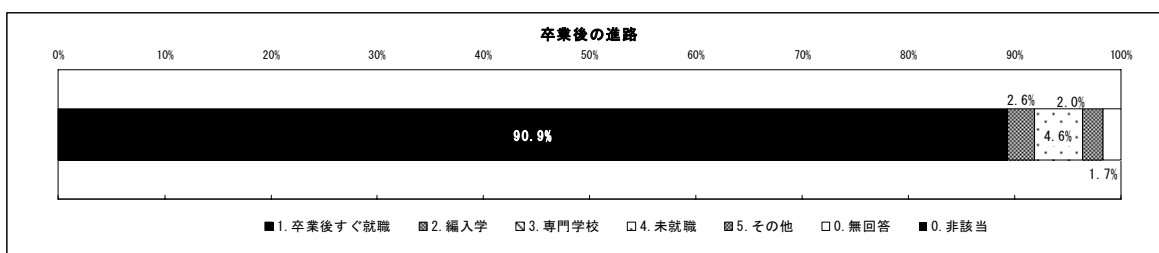
いずれの項目も3.8から4.1で、全般的に評価は高く、特に「クラス人数は適正だった」「授業に必要な機器・設備が設置されていた」が4.1で最も高い。本学ではグループワーク形式を取り入れた科目、およびクラス単位で受講する科目が非常に多い。高い評価結果は、グループ編成などにおいて、適切な運営が実現されているということであろう。

最も低い評価は、「自習のために教室・機器・設備を十分に利用できた」の3.8である。数値だけをみれば決して低いとはいえないが、本学では授業時間外に個人あるいはグループで実施する課題が多いことから、今後さらに適切なサポートを行うことが求められる。



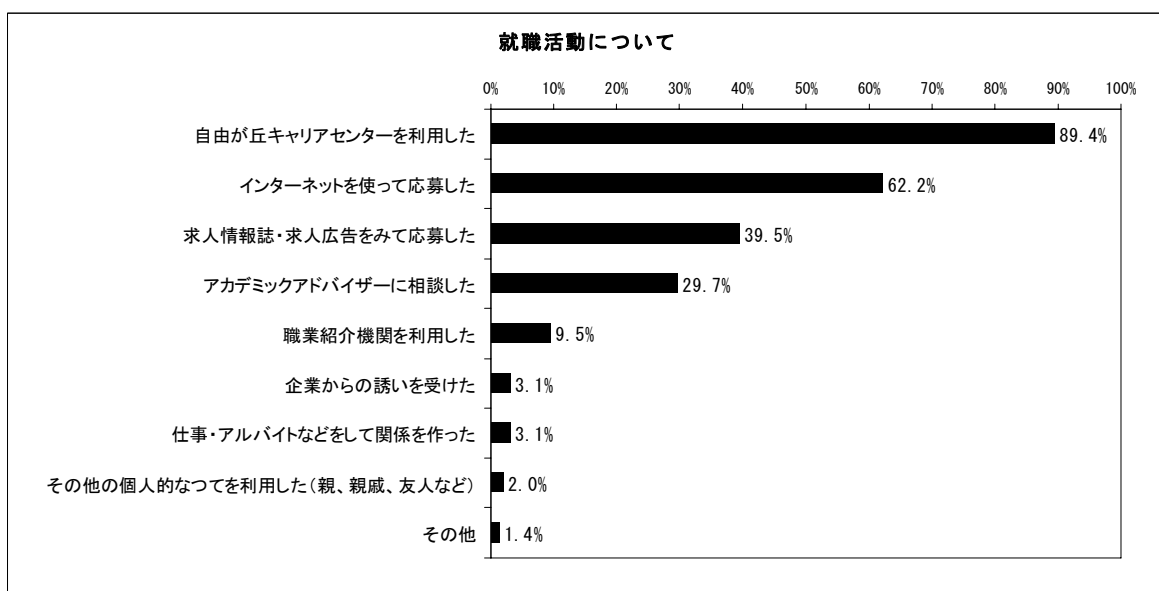
6. 卒業後の進路

卒業後の進路は、「卒業後すぐ就職」が最多の90.9%で前回より2.6ポイント増加している。本項目は近年上昇の一途であり、本学の学生の就職志望傾向がさらに高まっていることがわかる。既述の学生の目標や資格取得などの設問の結果と総合的であり、本学の特色が一般に周知され、目的意識をもった学生が入学してきているといえる。一方、「未就職」は4.6%で前回調査と比較して0.3ポイント減少し、「編入学あるいは専門学校」は2.6%と従来どおり低い。



また「どのような就職活動をしたのか」（複数回答）では、「自由が丘キャリアセンターを利用した」が最も多い回答で、89.4%にのぼった。前回調査との比較でも、0.5ポイント上昇している。自由が丘キャリアセンターという専門部門が、就職活動を行っている学生にとって大きな支えとなっていることがうかがえる。

それに続く「インターネットを使って応募した」（62.2%）、および「求人情報誌・求人広告をみて応募した」（39.5%）は、いずれも低下傾向である。前回調査から、各5.5ポイント、1.0ポイント減少した。



7. まとめと今後の課題

2012年度にも、FD委員会に設けられたFD調査グループが同様の調査を実施した。その結果と本年度の調査結果との比較を行ったが、全体として調査項目の傾向においては大きな変化はみられない。評価の高い項目、そうでない項目はほぼ同じであるという傾向を示している。

学習成果に関する調査項目の評価をみると、本学学生の多くは、就職して実社会で活躍すること、そのために必要な知識や技能を身につけたいという目標を持って入学している。そして、入学後は、コミュニケーション能力やチームで協働する力、ビジネスマナー、パソコンスキル、文章作成力などビジネス実務の基礎となる能力を身につけて社会に出ていく、ということがわかる。この結果から、本学が示す学習・教育目標にそって設置しているカリキュラムや授業プログラムに対する学生の満足度は概ね高いと判断することができる。

また、本調査における学生の評価が高い項目として、本学が掲げている「総合的学習支援 SANNO4つのサポート」にかかわる項目をあげることができる。「総合的学習支援 SANNO4つのサポート」とは、「アカデミック・サポート（教職員による学習支援）」、「学びのサポート（学生同士によるサポート）」、「キャリアサポート（教職員による進路形成上の支援）」、「サービスサーニングサポート（学生の自主的なボランティア活動に対する教職員のサポート）」の4つで構成されている。本調査では、アカデミック・アドバイザーのかかわり、「学びのサポート」科目での学生間のサポート、自由が丘キャリアセンターの就職活動支援、SSS活動を行うことにより得た成果、また、学生サポートの基盤となる学生総合サービスセンターへの評価はいずれも高く、前回調査と比較して同様もしくは上昇している。これは、学生一人一人に対するきめこまかいサポートを、教職員が一体となって、多面的に行っていることのあらわれといえよう。

最後に、今後の課題を示す。設備面では、教育環境への全体的な満足度が前回調査よりも0.2低下している。今年度より本格的に経営学部と号館および教室を共有する体制になり、1年次の時とは異なる施設の使用ルールや、授業時間外でのグループ学習などの場所の確保に、学生が戸惑うこともあったように見受けられた。授業時間外にも十分学習活動ができるよう、教室の配当や自習教室の周知徹底などの面で、学校としてさらなる努力をしていく必要がある。

学習効果に関して、例年比較的低い評価となっているのが、人に教えることや、自ら能動的に動くこと（自分で目標を立て学習を継続すること、PDSを回して課題解決をすることなど）といった項目である。これらは、「実務学習研究」をはじめとした多くの授業科目の中で、学習目標として設定されている。今後、学生がこれらの能力をより高めていくように、教員がサポートしていくことが求められる。

なお、本調査を総体的にみると、前回調査と比較して、全体としての傾向は変わらないものの、小数点1位以内の範囲ではあるが評価が低下した項目が多かった。特定の項目が目立って大きく低下しているという状況ではないため、大きな課題を特定することは困難であるが、この結果を真摯に受け止め、学生一人一人が、自らの到達目標により近づき、学習成果をあげることができるようなサポート体制について、さらなる工夫を継続していく必要がある。

FDレポート目次一覧

2003 年度 FD レポート vol.1

I. 2003 年度授業研究テーマ報告			
1. メディアの開発と実施	第Ⅱ部学科	豊田雄彦	
II. 定例報告			
1. FD・SD研修報告		FD委員会	渡辺裕一
2. 授業参観結果報告		FD委員会 授業能力開発グループ	渡辺裕一
3. 授業評価結果報告		FD委員会 授業評価グループ	風戸修子
III. FD調査報告			
1. 学生満足度調査報告		教学委員会 学生満足度調査グループ	鈴木茂
2. 企業調査報告		FD委員会	池内健治
FD委員長：池内健治		編集担当：奥村憲、渡辺裕一、中村知子（FDレポート編集グループ）	

2004 年度 FD レポート vol.2

I. 2004 年度授業研究テーマ報告			
1. 「就業とキャリア」の開発と実施	第Ⅱ部学科		森脇道子
2. 「文章表現」の開発と実施		教学委員会 基礎学習プログラムグループ	斎藤勇二
II. 定例報告			
1. FD・SD研修報告		FD委員会	渡辺裕一
2. 授業参観結果報告		FD委員会 授業能力開発グループ	渡辺裕一
3. 授業評価結果報告		FD委員会 授業評価グループ	風戸修子
4. 学外におけるFD活動報告		FD委員会	池内健治
III. FD調査報告			
1. 第Ⅰ部学生満足度調査報告		FD委員会 学生・卒業生調査グループ	池内健治
2. 第Ⅱ部学生満足度調査報告		FD委員会 学生・卒業生調査グループ	池内健治
3. 卒業生アンケート調査1		学生委員会 キャリア情報サービスグループ	小野紘昭
4. 卒業生アンケート調査2		学生委員会 キャリア情報サービスグループ	小野紘昭
(特色ある大学教育支援プログラム 2004 年度補助事業)			
FD委員長：池内健治		編集担当：奥村憲、渡辺裕一、中村知子（FDレポート編集グループ）	

2005 年度 FD レポート vol.3

I. 2005 年度授業研究テーマ報告			
1. 社会人学生のための学習ティップス	第Ⅱ部学科		池内健治
2. 基礎学習プログラムの開発と実施		教学委員会 基礎学習プログラムグループ	奥村憲
II. 定例報告			
1. FD・SD研修報告		FD委員会 FD研修会グループ	渡辺裕一
2. 授業参観結果報告		FD委員会 授業参観グループ	渡辺裕一
3. 授業評価結果報告		FD委員会 授業評価グループ	風戸修子
4. 学外におけるFD活動報告		FD委員会	池内健治
5. 学生FD協議会報告		FD委員会 学生FD協議会	池内健治
III. FD調査報告			
1. 第Ⅰ部学生満足度調査報告		FD委員会 学生・卒業生調査グループ	鈴木茂・豊田雄彦
2. 第Ⅱ部学生満足度調査報告		FD委員会 学生・卒業生調査グループ	鈴木茂・豊田雄彦
3. 卒業生のキャリア意識および支援策の調査報告		学生委員会職業支援グループ	小野紘昭
FD委員長：池内健治		編集担当：竹内美香、伊藤敦、中村仁（FDレポートグループ）	

2006 年度 FD レポート vol. 4

I. 2006 年度授業研究テーマ報告			
1. 教養科目「現代を生きる人間」の開発と実施			中村知子
2. 学内ボランティア「サービスマーケティング」の開発と実施			中村知子
II. 定例報告			
1. FD・SD研修報告	FD委員会	FD研修会グループ	池内健治
2. 授業参観結果報告	FD委員会	授業参観・ピアレビューグループ	小野紘昭
3. 授業評価結果報告	FD委員会	授業評価グループ	風戸修子
4. 学外におけるFD活動報告	FD委員会		池内健治
5. 学生FD協議会報告	FD委員会	学生FD協議会	池内健治
III. FD調査報告			
1. 第I部学生満足度調査報告	FD委員会	学生満足度調査グループ	鈴木茂・市川博
2. 第II部学生満足度調査報告	FD委員会	学生満足度調査グループ	鈴木茂・市川博
FD委員長:池内健治		編集担当:竹内美香、伊藤敦、中村仁(FDレポート・HP公開検討グループ)	

2007 年度 FD レポート vol. 5

I. 2007 年度授業研究テーマ報告			
1. GPA制度の導入			市川博
2. 授業科目「ビジネスマナー」の開発と実施			風戸修子
II. 定例報告			
1. FD・SD研修報告	FD委員会	FD研修会グループ	豊田雄彦
2. 授業参観結果報告	FD委員会	授業参観・ピアレビューグループ	小野紘昭
3. 授業評価結果報告	FD委員会	授業評価グループ	風戸修子
4. 学外におけるFD活動報告	FD委員会		池内健治
5. 学生FD協議会報告	FD委員会	学生FD協議会	池内健治
6. SD活動報告	FD委員会		渡辺守
III. FD調査報告			
1. 第I部学生満足度調査報告	FD委員会	学生満足度調査グループ	小野紘昭
2. 第II部学生満足度調査報告	FD委員会	学生満足度調査グループ	小野紘昭
FD委員長:池内健治		編集担当:竹内美香、伊藤敦、菅井郁(FDレポート・HP公開検討グループ)	

2008 年度 FD レポート vol. 6

I. 本学のFD活動の特色(FD活動のあゆみ)			
II. 2008年度FD活動の概要		教育研究推進センター	池内健治
III. 2008年度授業研究テーマ報告			
1. 授業科目「就業とキャリア」の科目改善と実施			池内健治
2. 第II部授業科目「プロジェクト実践研究」の開発と実施			池内健治
IV. 定例報告			
1. FD・SD研修報告	FD研修会グループ		小野紘昭
2. 授業参観結果報告	FD委員会	授業参観・ピアレビューグループ	小野紘昭
3. 授業評価結果報告	FD委員会	FD授業評価グループ	風戸修子
4. 学外におけるFD活動報告			池内健治
5. 学生FD協議会報告	学生FD協議会		池内健治
6. SD活動報告	FD・SD協議会		渡辺守
7. 研究助成報告会	教育研究推進センター		池内健治
V. FD調査報告			
1. 第I部学生満足度調査報告	FD調査グループ		小野紘昭
2. 第II部学生満足度調査報告	FD調査グループ		小野紘昭
教育研究推進センター長:池内健治		編集担当:竹内美香、伊藤敦、菅井郁(FD情報発信グループ)	

2009年度FDレポート vol.7 大学教育改革推進事業特集		
I. 2009年度FD活動の概要	教育研究推進センター	池内健治
II. 特集 大学改革推進事業		
III. 2009年度授業研究テーマ報告		
1. 「人に教える実務学習法」開発		池内健治
2. 学生の地域と連携した課題実践学習		岩崎暁・池田るり子 伊藤敦・長島弘 三浦智恵子・江崎和夫
IV. 定例報告		
1. FD・SD研修報告	FD研修会グループ	豊田雄彦
2. 授業参観結果報告	FD委員会授業参観・ピアレビューグループ	石塚浩美
3. 授業評価結果報告	FD委員会FD授業評価グループ	豊田雄彦
4. 学外におけるFD活動報告	教育研究推進センター	
5. 学生FD協議会報告	学生FD協議会	池内健治
6. SD活動報告	FD・SD協議会	渡辺守
7. 研究助成報告会	教育研究推進センター	池内健治
V. FD調査報告		
1. 第I部学生満足度調査報告	FD調査グループ	石塚浩美
2. 第II部学生満足度調査報告	FD調査グループ	石塚浩美
教育研究推進センター長：池内健治		編集担当：伊藤敦，石嶺ちづる（FD情報発信グループ）

2010年度FDレポート vol.8 大学教育改革推進事業特集		
I. 2010年度FD活動の概要	教育研究推進センター	池内健治
II. 特集 大学改革推進事業		
1. 大学改革推進事業の概要		
2. シンポジウム報告		
III. 2010年度授業研究テーマ報告		
1. 授業科目「学びのサポート」における学生の到達目標設定プログラム開発		風戸修子・石嶺ちづる
2. カリキュラムマップによる到達度目標設定と評価		池内健治
IV. 定例報告		
1. FD・SD研修報告	FD研修会グループ	豊田雄彦
2. 授業参観結果報告	FD委員会授業参観・ピアレビューグループ	石塚浩美
3. 授業評価結果報告	FD委員会FD授業評価グループ	豊田雄彦
4. 学外におけるFD活動報告	教育研究推進センター	
5. 学生FD協議会報告	学生FD協議会	池内健治
6. SD活動報告	FD・SD協議会	渡辺守
7. 研究助成報告会	教育研究推進センター	池内健治
V. FD調査報告		
1. 第I部学生満足度調査報告	FD調査グループ	石塚浩美
2. 第II部学生満足度調査報告	FD調査グループ	石塚浩美
教育研究推進センター長：池内健治		編集担当：水島章広，伊藤敦，石嶺ちづる（FD情報発信グループ）

2011年度FDレポート vol.9 就業力育成支援事業特集

I. 2011年度FD活動の概要	教育研究推進センター	池内健治
II. FD中期プラン(2010~2012年度)の中間評価		池内健治
III. 特集 就業力育成支援事業		池内健治
IV. 定例報告		
1. FD・SD研修報告	FD研修会グループ	豊田雄彦
2. 兼任・専任教員FDミーティング	兼任教員FD運営グループ	石塚浩美
3. 授業参観結果報告	FD委員会授業参観・ピアレビューグループ	石塚浩美
4. 授業評価結果報告	FD委員会FD授業評価グループ	豊田雄彦
5. 学外におけるFD活動報告	教育研究推進センター	池内健治
6. SD活動報告	FD・SD協議会	鹿沼行央
7. 研究助成報告	教育研究推進センター	池内健治
V. FD調査報告		
1. 第I部卒業時学生調査報告	FD調査グループ	石塚浩美
2. 第II部卒業時学生調査報告	FD調査グループ	石塚浩美
教育研究推進センター長：池内健治		編集担当：水島章広，伊藤敦，石嶺ちづる（FD情報発信グループ）

2012年度FDレポート vol.10

I. 2012年度FD活動の概要		
1. 2012年度FDセンター重点目標	教育研究推進センター	池内健治
2. 2012年度FD活動の概要	教育研究推進センター	池内健治
II. 授業研究テーマ報告		
1. 自由が丘産能短期大学士課程教育のあり方	教育研究推進センター	池内健治
2. 学習支援:SANNO4つのサポート	学生委員会	風戸修子
III. 定例報告		
1. FD・SD研修報告	教育研究推進センター FD・SD研修グループ	豊田雄彦
2. 兼任・専任教員FDミーティング実施報告	教育研究推進センター兼任・専任教員FD運営グループ	石塚浩美
3. 授業参観結果報告	FD委員会 授業参観・授業評価小委員会	石塚浩美
4. 授業評価結果報告	FD委員会 授業参観・授業評価小委員会	豊田雄彦
5. 学外におけるFD・SD活動報告	教育研究推進センター FD・SD研修グループ	池内健治
6. 高大連携活動報告	教育研究推進センター	池内健治
7. SD活動報告	FD・SD協議会	鹿沼行央
8. 研究助成報告	研究助成委員会	池内健治
IV. FD調査報告		
第I部卒業時学生調査報告	FD委員会 授業参観・授業評価小委員会	石塚浩美
教育研究推進センター長：池内健治		編集担当：水島章広，伊藤敦，石嶺ちづる（FD情報発信グループ）

2013 年度 FD レポート vol. 11

I. 2013 年度 F D 活動の概要		
1. 2013 年度 F D センター 重点目標	教育研究推進センター	池内健治
2. 2013 年度 F D 活動の概要	教育研究推進センター	池内健治
II. 特集 本学のカリキュラムマップ	教育研究推進センター	池内健治
III. 定例報告		
1. F D・S D 研修報告	教育研究推進センター F D・S D 研修グループ	豊田雄彦
2. 授業参観結果報告	F D 委員会 授業参観・授業評価小委員会	池内健治
3. 授業評価結果報告	F D 委員会 授業参観・授業評価小委員会	豊田雄彦
4. 学外における F D 活動報告	教育研究推進センター	池内健治
5. S D 活動報告	S D 推進委員会	鹿沼行央
6. 研究助成報告	研究助成委員会	池内健治
IV. F D 調査報告		
第 I 部 卒業時学生調査報告	F D 委員会 授業参観・授業評価小委員会	三浦智恵子
教育研究推進センター長：池内健治		編集担当：石嶺ちづる，伊藤敦，佐野達（F D レポート編集グループ）

2013 年度
自由が丘産能短期大学 F D レポート vol.11

2014 年 3 月 31 日発行

編集：自由が丘産能短期大学 教育研究推進センター

F D レポート編集グループ

池内健治（教育研究推進センター長）

石嶺ちづる、伊藤敦、佐野達

発行：自由が丘産能短期大学

〒158-8630

東京都世田谷区等々力 6 丁目 39 番 15 号

T E L 03-3704-4011 F A X 03-3704-7859

（禁無断転載）